

風土記の丘地内遺跡発掘調査報告IX

——山代郷正倉跡・山代方墳——

付：大庭鶏塚古墳

93・3

教育委員会

例　　言

1. 本書は1992（平成4）年度に島根県教育委員会が国庫補助金を得て実施した、風土記の丘地内遺跡発掘調査事業（第10次）の調査報告書である。調査は、将来的な同地内遺跡の保護対策を立てるための基礎資料を得る目的で行った。

2. 調査は地内遺跡のうち、山代郷正倉跡（松江市大庭町字内屋敷）、山代方墳（松江市山代町字二子塚）についておこなった。

3. 調査組織は次のとおりである。

調査指導　　山本　清（島根県文化財保護審議会会長）、大塚初重（明治大学文学部教授）、池田満雄（島根県文化財保護審議会委員）、渡辺貞幸（島根大学法文学部教授）、三浦　清（島根大学教育学部教授）

事務局　　目次理雄（文化課長）、山根成二（課長補佐）、高橋　研（文化係長）、川原和人（文化課主幹）、内田　融（文化財係長）

調査員　　松本岩雄（古代文化センター企画員）、角田徳幸（文化財係主事）、熱田貴保（同）、池淵俊一（同）

調査参加者　高麗玉子、荒川清子、植松一枝、玉川敏子、吉野信子、福島初枝、北垣澄子、高麗寿子、水野千久子、水野里江、横山久夫、柳浦正子、角　吉江、永久恵美子、角陽子

遺物等整理　堀江五十鈴、月森和子

調査協力　　島根大学考古学研究室、島根県立八雲立つ風土記の丘、松江市教育委員会、大庭公民館、山代原自治会、（有）亀山工務店、正井るみ子、若佐裕子、津森真弓

4. 発掘に際しては、水野正人、石倉千代司、渡辺繁美、齋藤守一の各氏をはじめ地元の方々には終始多大な協力をいただいた。

5. 挿図中のX・Yは、国土調査法による第III系X・Y軸である。したがって磁北より7°12'、真北より0°32'東の方向を示している。矢印（N）も同様な方向を示す。

6. 遺物の実測は池淵が行った。本調査で出土または採集した遺物、及びこれにかかる実測図・写真は島根県教育委員会文化課で保管している。

7. 本書で使用した山代方墳墳丘測量図は、昭和57～58年にかけて島根大学考古学研究室によって測量され昭和60年に作成されたものである。また付図として掲載した大庭鶏塚古墳の測量図は平成2年度に島根県教育委員会によって測量し平成4年度に作成した図面である。

8. 本書の編集は、調査員協議のうえ、松本、池淵が行った。執筆は川原、熱田、松本、池淵、丹羽野が行い、文責は文末、目次に示した。

目 次

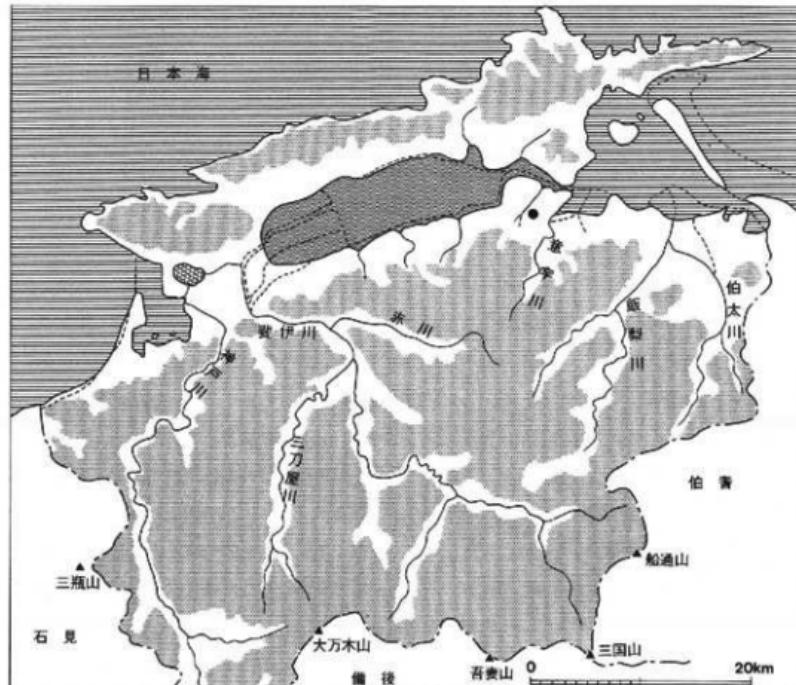
I 調査に至る経緯	(川原)	1
II 位置と環境	(熱田)	3
III 山代郷正倉跡発掘調査	(松本)	6
1. 調査区の設定と調査の経過		6
2. 検出遺構の概要		6
3. 出土遺物		12
4. まとめ		13
IV 山代方墳発掘調査	(池淵)	15
1. 調査区の設定と調査の経過		15
2. 調査の結果		17
(1) 第1トレンチ		17
(2) 第2トレンチ		21
(3) 第3トレンチ		23
3. 遺物		25
(1) 墳輪		25
(2) 須恵器		26
4. まとめ		32
(1) 墳丘について		32
(2) 出土遺物について		34
(3) 小結		37
付 大庭第塚古墳測量調査	(丹羽野)	38

I 調査にいたる経緯

八雲立つ風土記の丘は、古代出雲の政治文化の中心地で貴重な遺跡が数多く存在している松江市東部の意宇平野一帯を地内とし、史跡の整備と資料館の建設を行って昭和47年にオープンした。

資料館は風土記の丘地内から出土した遺物はもとより県下の考古資料を常設展示するとともに毎年特別展を行って活用を計ってきた。史跡の整備については、開所時に出雲国庁跡、出雲国分寺跡、大草古墳群及び資料館の敷地内に存在する岡田山古墳の整備を行った。地内にはその他にも未指定、未整備の貴重な遺跡が多数あるため、それらの遺跡の実態を把握し、第2次の整備計画策定の資料を得るために、昭和48年度から発掘調査を実施することとなった。

調査は、まず国分寺の北側に位置する国分尼寺跡から実施したが、寺域や整備可能な建物構造は検出できず、引き続き行った岩屋後古墳の調査でも充分な成果をあげられなかった。しかしながら



第1図 遺跡の位置図（●印）（古地理は約1,200年前の推定線「地質論集」第36号1990年による）

昭和53年～54年にかけての調査では、「出雲国風土記」に記載されている山代郷正倉跡の倉庫を発見し、調査の目的を果たすことができた。山代郷正倉跡は昭和55年に国の指定をうけ、同年から土地の買上げ整備を行い、昭和58年に第1次の整備が完了した。

山代郷正倉跡の調査期間中に遺跡の範囲内で民間業者による宅地造成計画が発覚したことから、改めて都市計画法で定められている市街化区域内の調査が急務となってきた。そのような状況を踏まえ、昭和55年度からは、宅地化が急速に進んできている出雲国古館推定地、軍團推定地、四王寺跡の調査と風土記の丘地内の地形測量図(1/1,000)の作成を行った。四王寺跡からは主要な建物の基壇跡などを検出し、平成4・5年度で指定、土地買上げを行い、整備することになった。他の遺跡は、すべての地域で遺構を確認しているものの、調査範囲が狭かったため今のところその性格が十分把握されていない。

平成元年度は、「出雲国風土記」に神名権野と称された信仰の山で、中世には山城が築かれた茶臼山の調査を行い、平成2～3年度は「山代・大庭古墳群」の中心的な存在である山代二子塚古墳の発掘調査を行った。二子塚の調査では、周溝を確認し、古墳の範囲をほぼつかむことができた。ただ、この墓域内には、すでに民家が数軒建ち並び、古墳の保存に支障をきたす状況になってきているので、早急に保存、活用をはかるための計画を策定することが必要となってきた。

平成4年度の調査は、山代方墳と山代郷正倉跡の西側を発掘調査した。山代方墳は二子塚の東に隣接して築かれているが、墳丘の北側は造園用の植林が行われており、南側には民家等が建ち並んでいる。南側周溝部に建てられている公民館は築造年代が古く建物が老朽化してきているので、これを建て替える計画が平成3年度頃に起こった。県教委では、地元と建設場所の変更について再三協議を重ねてきたが、二子塚古墳整備の協力や将来、山代方墳の整備を行う際には、公民館を移転することなどが公約されたので、建設はやむを得ないと判断し、平成4年度に調査を実施することとなった。今回の調査は、このように公民館の建て替えがきっかけになったが、古墳の範囲や、周溝の構造等を把握する目的で行った。ただ、造園用の植林が行われている北側は調査の承諾が得られなかつたため、東西の周溝及び公民館建設予定地にトレンチを設定して実施した。

また、山代郷正倉跡の西側調査区は土地買上げに伴う家屋移転地の事前調査である。正倉跡の第2次の整備は、国道432号線沿いの東部分を行うもので、これに伴う土地の買上げは、文化庁の国庫補助金を受けて昭和63年度から実施してきている。平成4年度から土地を購入する土地所有者は、国道を挟んで西側にも土地を所有しており、この地に家屋を移転したい要望があったため、急速、発掘調査を行って遺構の確認を行い、家屋移転地の選定について調整を計ることになった。

(川原和人)

II 位置と環境

八雲立つ風土記の丘は、古代出雲文化を代表する重要遺跡の集中する松江市の南郊大庭町の東西5km、南北2.5kmの範囲を指し、これに隣接する遺跡集中地区をその周辺地区と捉えている。

自然地形から見ると、この地域は茶臼山の北を流れる馬橋川水系の作り出す小平野と、八雲村から流れ出る意宇川水系の肥沃な氾濫原、そして屹立する茶臼山（標高171.5m）とその裾に広がるなだらかな段丘で構成されている。このように、生活適地として早くから人々の活動の痕跡が認められ、時代と共に人々に多様な活動の舞台を提供してきた。

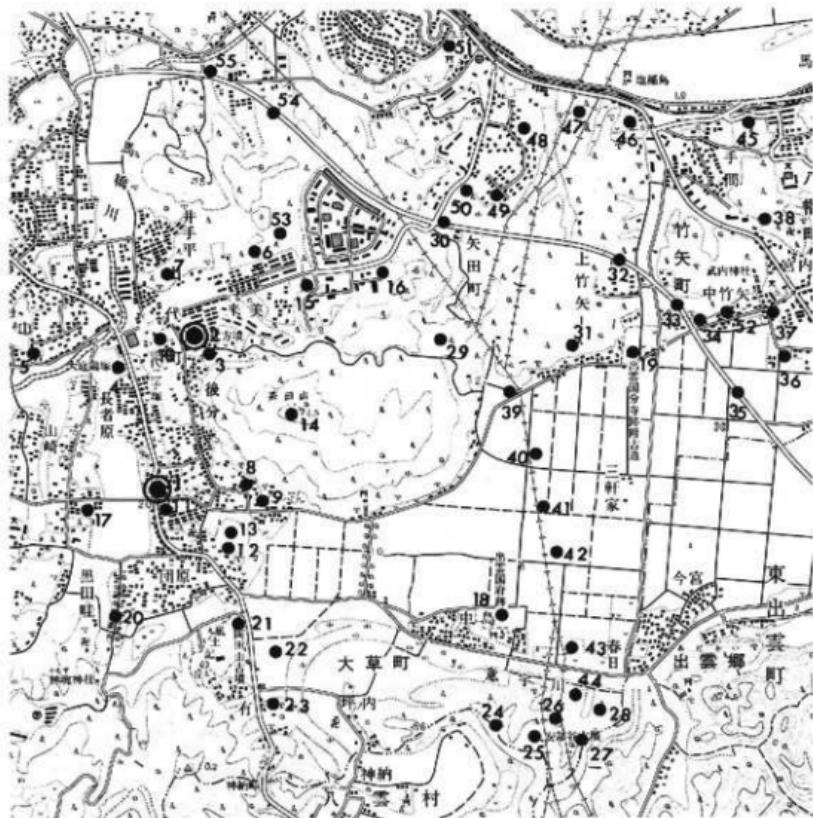
茶臼山の西麓に広がる乃木段丘と呼ばれるゆるやかな台地状の下黒田遺跡では旧石器時代の玉飾製の剝片、石核が、そして、市場遺跡では黒曜石製の細石核が出土するなど、黎明期の資料が近年の調査によってようやく明らかになりつつある。

これに続く縄文時代の生活を復元できる良好な遺跡は明確でないが、馬橋川中流の低湿地に形成された石台遺跡は縄文後・晚期の土器が多く出土している。その内晚期の土器には粗痕が確認されており、当地における水稻農耕の開始期を考える上で重要な位置を占めている。意宇平野では法華寺前遺跡、才塚遺跡等が知られており、いずれも低湿地に立地する。

弥生時代になると縄文時代と複合するもののほか布田遺跡、宮田遺跡、三軒屋遺跡など意宇平野の中心部にその生活圏が広がる。意宇川下流の布田遺跡では前期後半から弥生時代を通じて営まれ、夫敷遺跡、上小紋遺跡、向小紋遺跡では後期の水田が検出されている。後期の墳墓では的場遺跡（墳丘墓）、来美遺跡（四隅突出型墳丘墓）、間内越遺跡（四隅突出型墳丘墓）などが確認されている。

古墳時代に入るとこの地域は数多くの古墳が造営される。前期に遡る確実な例は知られていないが、中期に入ると茶臼山を中心とした丘陵部で活発な造営が始まると、大橋川に望む丘陵上には、手間古墳（前方後円墳、全長約70m）、井ノ奥4号墳（前方後円墳、全長57.5m）、石屋古墳（方墳、1辺40m）、竹矢岩船古墳（前方後方墳、全長約47m）など首長墓クラスの古墳が造営されている。一方、茶臼山西麓には後述する大庭・山代古墳群、そして南西側には東淵寺古墳（前方後円墳、全長約62m）、象嵌銘の鉄刀を出した岡田山1号墳（前方後方墳、横穴式石室、全長24m）、円墳では県下3番目の規模をもつ同2号墳（直径約44m）、獅噭彫頭大刀を出した御崎山古墳（前方後方墳、横穴式石室、全長約40m）、人物埴輪を出した岩屋後古墳（石棺式石室）、石棺式石室としては古相の古天神古墳（前方後方墳、横穴式石室、全長約27m）、整美な家形の形態を残す安部谷横穴墓群（6支群）等がある。

歴史時代になると、前代の政治基盤を背景にこの地方は政治の中心地として栄えた。意宇平野の



第2図 周辺の主要遺跡分布図 1:25000

- | | | | |
|-------------|-------------|--------------|-------------|
| 1. 山代郷正倉跡 | 15. 狐谷横穴群 | 30. 平所遺跡 | 44. 天満谷遺跡 |
| 2. 山代方墳 | 16. 十王免横穴群 | 31. 上竹矢古墳群 | 45. 清山古墳 |
| 3. 永久宅裏古墳 | 17. 東洞寺古墳 | 32. 才ノ峠遺跡 | 46. 竹矢岩舟古墳 |
| 4. 大庭鶏塚古墳 | 18. 出雲國行跡 | 33. 中竹矢遺跡 | 47. 手間古墳 |
| 5. 向山東古墳群 | 19. 出雲國分寺跡 | 34. 國分寺瓦窯跡 | 48. 井ノ奥古墳群 |
| 6. 來美廃寺 | 20. 黒田畦土居遺跡 | 35. 布田遺跡 | 49. 井ノ奥4号墳 |
| 7. 井手平古墳群 | 21. 岡田山古墳群 | 36. 宮内遺跡 | 50. 間内東古墳丘墓 |
| 8. 市場遺跡 | 22. 岩屋後古墳 | 37. 平浜八幡宮前遺跡 | 51. 石屋古墳 |
| 9. 四王寺跡 | 23. 御崎山古墳 | 38. 過迎寺古墳群 | 52. 出雲國分尼寺跡 |
| 10. 山代二子塚古墳 | 24. 西百塚山古墳群 | 39. 間内遺跡 | 53. 來美遺跡 |
| 11. 下黒田遺跡 | 25. 東百塚山古墳群 | 40. 上小綱遺跡 | 54. 勝負遺跡 |
| 12. 団原古墳 | 26. 古天神古墳 | 41. 四配田遺跡 | 55. 石台遺跡 |
| 13. 小無田遺跡 | 28. 安部谷古墳群 | 42. 神田遺跡 | |
| 14. 茶臼山城跡 | 29. 週田古墳 | 43. 大屋敷遺跡 | |

南に出雲國分寺が置かれ、平野を挟んで北側には出雲國分寺、出雲國分尼寺が造立されている。「出雲國風土記」に記載された山代郷南新造院跡（四王寺）、同北新造院跡（来美庵寺）、山代郷正倉跡は、茶臼山西裾で確認されている。

山代方墳は松江市南郊、山代町字二子塚893番地1外に所在する。現在南側の周溝及び周堤を除く約3,578m²が史跡として指定されている。

古墳は茶臼山から派生する低丘陵上に立地し、南の永久宅後古墳（石棺式石室）、西の国指定史跡山代二子塚古墳（前方後方墳、全長94m、平成2・3年度調査）、同大庭鶴塚古墳（1辺約42mの方墳、造り出し2）とともに出雲地方最大級の山代・大庭古墳群を構成している。

山代郷正倉跡は松江市大庭町字内原敷35番地外に所在する。国道432号線と県道の交差する大庭十字路の北東約5,417m²が史跡として指定されている。

茶臼山の西麓に広がるなだらかな乃木段丘上に立地する。過去3回の調査によってその概要が判明し、純柱倉庫群、掘立柱建物群等を検出し、多量の炭化米も出土している。
（熱田貴保）

表1 風土記の丘地内遺跡・発掘調査一覧

調査年次	調査対象遺跡	通年	報告書名
73年度(昭和48)	出雲國分尼寺跡(第1次)	1	
74年度(昭和49)	出雲國分尼寺跡(第2次)	2	『出雲國分尼寺 第2次発掘調査概報』1975.3
75年度(昭和50)	出雲國分尼寺跡(第3次)	3	『出雲國分尼寺 第3次発掘調査概報』1976.3
76年度(昭和51)	—		
77年度(昭和52)	岩屋後古墳	4	『岩屋後古墳発掘調査概報』1978.3
78年度(昭和53)	田原遺跡(第1次、山代郷正倉跡推定地)	5	『田原遺跡発掘調査概報Ⅰ—山代郷正倉跡—』1979.3
79年度(昭和54)	田原遺跡(第2次、山代郷正倉跡推定地)	6	『田原遺跡発掘調査概報Ⅱ—山代郷正倉跡推定地—』1980.3
80年度(昭和55)	河原遺跡(第3次、葉山ノ前、元鳥居他)山代郷正倉跡	7	『田原遺跡発掘調査概報Ⅲ—葉山ノ前・元鳥居他—』1981.3 『史跡出雲國山代郷正倉跡』1981.3
81年度(昭和56)	黒川村遺跡付御崎山古墳	8	『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告』I 1982.3
82年度(昭和57)	角焼遺跡付古天神古墳	9	II 1983.3
83年度(昭和58)	小糸田遺跡	10	III 1984.3
84年度(昭和59)	四王寺跡(第1次)	11	IV 1985.3
85年度(昭和60)	—		
86年度(昭和61)			
87年度(昭和62)	四王寺跡(第2次)	12	V 1988.3
88年度(昭和63)	隅原遺跡、下黒田遺跡	13	VI 1989.3
89年度(元成元)	茶臼山城跡、市場遺跡	14	VII 1990.3
90年度(平成2)	山代二子塚古墳(第1次)	15	
91年度(平成3)	山代二子塚古墳(第2次)	16	VIII 1992.3
92年度(平成4)	山代郷正倉跡、山代方墳付大庭鶴塚古墳	17	IX 1993.3

III 山代郷正倉跡発掘調査

1. 調査区の設定と調査の経過

平成4年度に発掘調査を実施した地点は、島根県松江市大庭町92番地である(第2図-1, PL 1-1)。ここは、国指定史跡である出雲国山代郷正倉跡の西側隣接地にあたる。この地が、山代郷正倉跡の指定地質上げに伴う家屋移転予定地とされたため、事前に発掘調査を実施し、遺構の遺存状態等を確認することとなった。

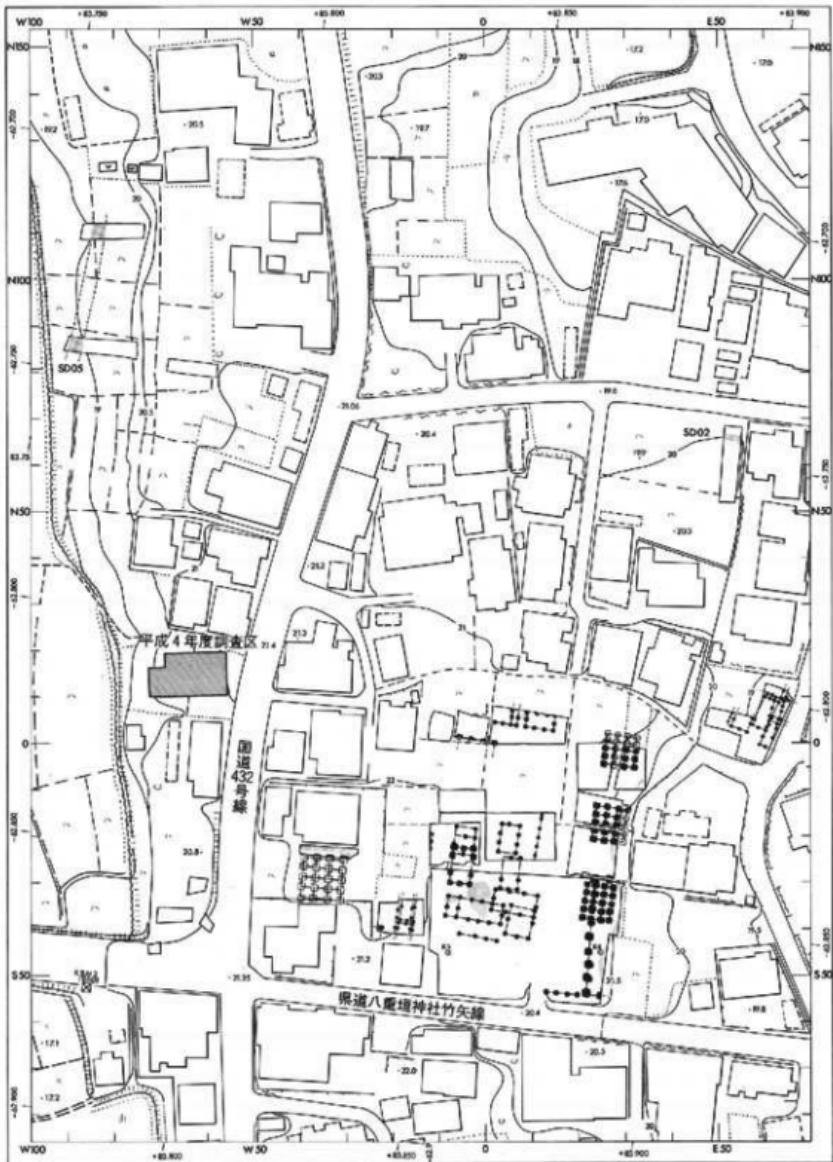
調査対象地一帯は、標高20~23mのなだらかな河成段丘で、乃木段丘と呼ばれている。この段丘は、赤褐色のローム層の上に黒灰色の大山や三瓶山からの火山灰土が堆積した土壤の形成となっている。国道432号線と県道八重垣神社竹矢線が交叉する通称「大庭十字路」から北方約60mのところである。国道432号線の西側にあたり、道路より1.4mあまり低いところである。道路脇の標高は約20mで、西方に向かってゆるやかに傾斜して西端では標高19mあまりとなり、その西側は急な崖となって約1.5m低くなり水田がつくられている(第3図, PL 1-2)。現状では畑になっているが、昭和45年まで水野正人氏宅が建っていたところである。

発掘調査は、平成4年8月3日に着手し、9月4日に終了した。調査にあたっては、まず磁北方向を基準線として3m×3mのグリッドを5箇所設定し、地下遺構の遺存状況を確かめることとした。かつて宅地になっていたところでもあり、擾乱を受けている部分も少なくなかったが、いずれの調査区においても柱穴等の遺構が残存していることが判明した。そこで、対象地内において可能な限り全面的な調査を実施することにし、最終的には149m²の調査を行なった。発掘調査に際しては土地所有者である水野正人氏をはじめ地元の方々には終始格別の御協力をいただいた。

2. 検出遺構の概要

土層は、東側(国道寄り)では厚さ20~30cmの表土(耕作土・黒褐色土)を除去すると赤褐色の地山に達する。調査区中央の北半では表土(耕作土)の下に厚さ約30cmの擾乱層があり、その下は赤褐色の地山となっている。調査区の西寄りでは地表面が次第に低くなっている、現地表面から地表面まで80~90cmある。この間には表土、暗黒褐色粘質土、暗黒褐色土、黒褐色土などの層がみられた(第4図)。これらの土層は、整然としたものではなく、明確な遺構面等を把握することはきわめて困難な状況であった。したがって、遺構の多くは地表面において確認したものである。

遺構としては溝状の落ち込み(SD 01)を1条検出したほか、柱穴状あるいはそれに類する落ち込みを約60箇所確認した。なお、第4図において「 $\frac{1}{2}$ 」印で表わした落ち込みは、後世の擾乱で



第3図 調査区配置図 1:1200

あることが明確なものである。約60箇所検出した柱穴状の遺構は、径1m前後の大形のもの5個、径50cm前後の中形のもの13個、径30cm以下の中形のもの15個のほか橢円形あるいは隅丸長方形のものが21個ある。そのほかに不整形な落ち込みが6個ある。

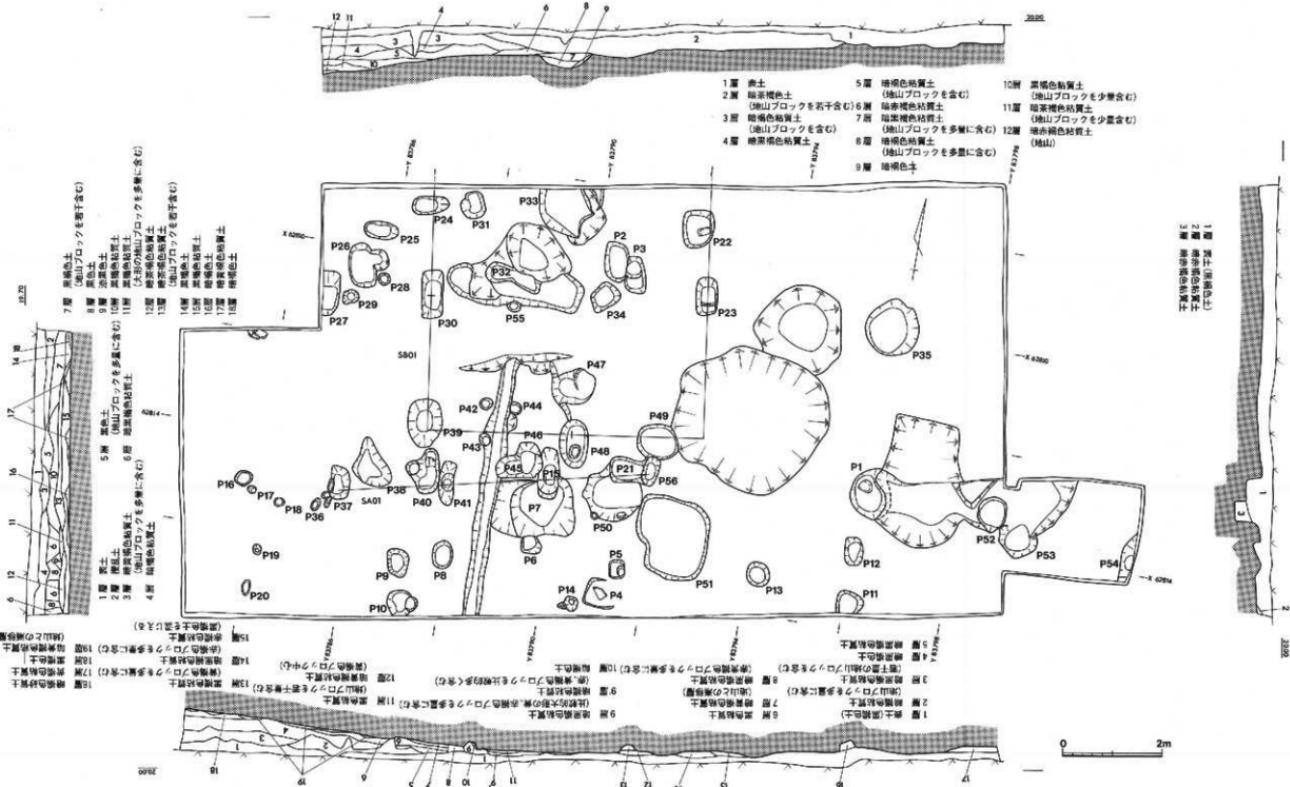
大形の落ち込みは、P1・P7・P33・P35・P50としたものであるが、その配置状況には特に関連性は認められず、建物跡等を推定するには至らなかった。また、すべての落ち込みを直ちに柱穴として認めてよいのか土層の状況のみでは把握できないものもあった。ここでは明らかに柱穴と考えられたP1について図示し、説明を加えておくことにする(第5図)。P1はほぼ円形の柱穴できわどく約1m、検出面からの深さ65cmあまりのものである。東壁は後世の掘削により大半が破壊されているため、現状の平面図では橢円形にみえるが、元は円形であったと思われる。周囲の壁は、わずかに斜めに掘られ、底面は水平になっている。底面には明赤褐色砂質土を厚さ5cmほど敷き、その上に30×20cm、厚さ5cmの礎板石を置き、その上に柱を建てたものと考えられる。礎板右の上部には、黒褐色砂質土が柱状にみとめられることから、径20cmあまりの柱が建っていたものと推定される。その周囲には明赤褐色砂質土、暗赤褐色土、暗褐色粘質土が詰められていた(P1, 4)。

中形の落ち込みは、P4・P8～13・P22・P34・P47・P49・P52・P53などである。これらは隅丸方形のもの(P4・P22など)や円形のもの(P8・P10・P11・P13・P49など)がある。これらについても調査区内においては並ぶようなものは認められず、建物跡等を想定することができなかった。第5図に示したP4は60×65cmあまりの隅丸方形を呈し、深さは約15cm遺存していた。掘り込みのほぼ中央部に25×20cm、厚さ17cmの石を据え、その周囲には、黒褐色土・褐色粘質土・暗褐色土が詰められていた。このほかに、P22の底面にも25×15cmあまりの石が置かれていた。なお、P13の中には近・現代の陶器類が入り込んでいたので、ごく近年に掘り込まれた可能性もある。

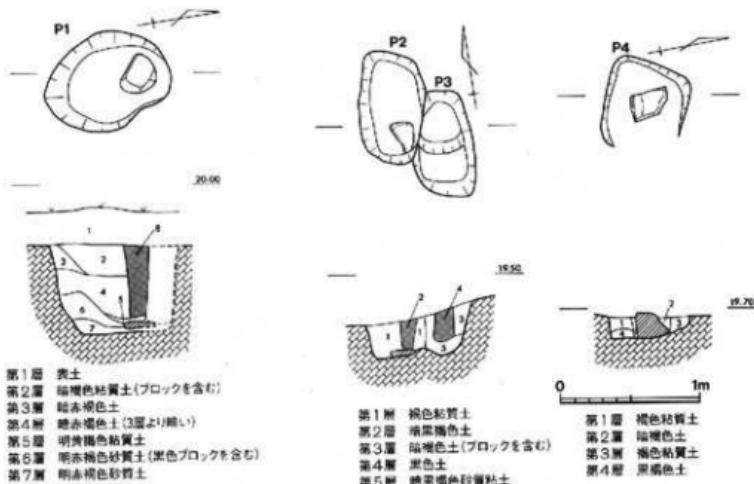
小形の落ち込みは、P16・P17・P18・P19・P20・P28・P29などである。調査区の西半に多く存在し、東半ではほとんどみられない。調査区内においては建物等を推定できるものはなかった。なおP28は径25cm、深さ39cmのていねいに掘り込まれた柱穴で、内部から土師質器皿が出土した。

橢円形あるいは隅丸長方形の落ち込みは21箇所確認した。検出した当初は通常の柱穴とは平面形状が異なるので、性格不明の土坑と考えていたが、P2やP48の土層観察の結果、柱痕跡がみとめられたことから柱穴と考えるに至った。

橢円形を呈する柱穴の典型例はP25・P48など、隅丸長方形を呈する柱穴の典型例はP27・P30などであるが、規模や柱穴内の土層の状況からすると両者は特に区別し得るものではない。大きさは長辺(径)60～100cm、短辺(径)30～70cmのもので、深さは40～60cmのものが多い。長辺の壁面は比較的急角度で掘り込まれているが、短辺の壁面はややゆるやかな角度で掘り込まれている。ここでは柱痕跡がみとめられたP2・P3を図示しておく(第5図)。



第4図 調査区块出露構実測図



第5図 第1～4ピット実測図

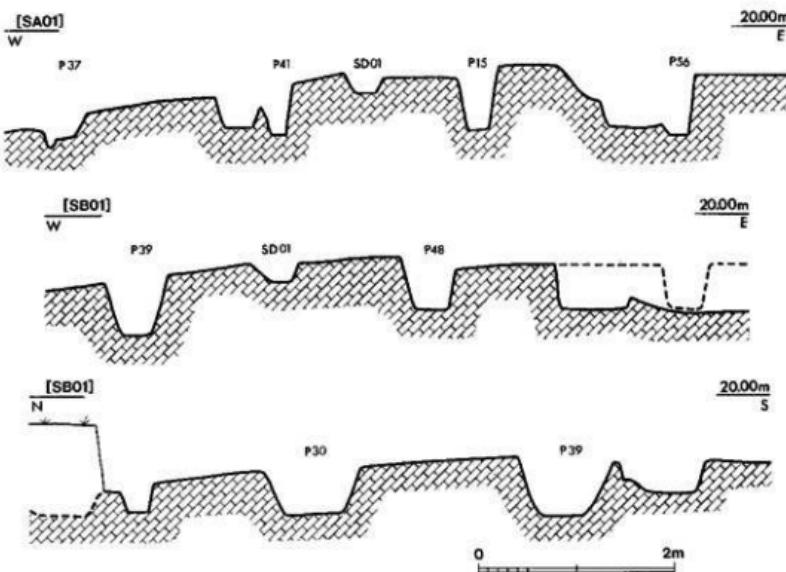
P2は長径80cm、短径50cm、深さ25cmある。底面に20×15cm、厚さ5cmの礎板石が置かれており、その上に幅約10cmの暗黒褐色土が柱状にみられ、両側には褐色粘質土が観察された。

P3は長辺75cm、短辺45cm、深さ約40cmある。中央部に幅15cmあまりの黒色土が柱状にみられ、その周りに暗褐色粘質土がある。

これらの柱穴は、主軸をほぼ南北方向に置くものと東西方向になるものがあり、一定の方向性がみとめられる。狭い範囲しか調査を実施していないため明確な建物跡等を把握するまでには至らなかったが、柱穴主軸方向や配列状況などからすれば、P30・P39・P48・P23が一つの建物跡と推測されるので、ここではSB01と仮称して紹介する。このほかに、P37・P41・P15・P56が東西方向にほぼ等間隔で並ぶことからとりあえずSA01としておく。

SB01 調査区中央の北半に位置する。梁間2間(約5.6m)で桁行は2間以上(推定5.4m以上)ではないかと思われる。建物主軸方位はN-8°-Wを示す。柱穴はすべて南北方向に長軸をもつ。柱間寸法は桁行2.7m(9尺)等間、梁間は西側から2.85m(9.5尺)、2.7m(9尺)あまりと考えられる(第4図、第6図)。

SA01 東西方向に並ぶ柱穴列であり、調査区内においては他に関連する柱穴がみあたらないことからとりあえずSA01とした。いずれも梢円形の柱掘り方をもつもので、その主軸はほぼ南北方向を示す。これらの柱穴は底面の高さも標高19m前後で一致しており、配列状況、掘り方の形



第6図 SA01・SB01 柱穴断面図

態などからして一連のものと考えられる。東西長は6.3mあり、柱間寸法は2.1m(7尺)等間である(第4図、第6図)。

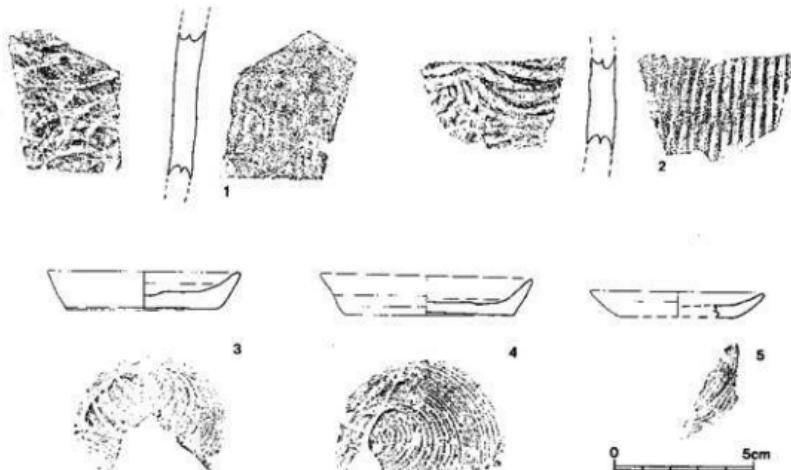
SD01 南北方向に走る小さな溝で、主軸方位はN-1°-Wである。上端幅30~40cm、下端幅20cm、深さ20cmあまりある。土層の状況から柱穴群より後から掘り込まれていることは明らかであったが、いつの時代のものは判断できなかった。

3. 出土遺物

出土遺物は量的に少ないが、須恵器、土師質土器、陶磁器類、古錢などがある(第7図、PL 6-2)。

須恵器は4点出土しており、いずれも甕の小片である。第7図1の須恵器片はP52付近の耕作土中から出土したものである。外面は平行叩き、内面は同心円文が認められる。焼成は良好で明青灰色を呈する。第7図2の須恵器片はP26付近の第2層中から出土したものである。外面に平行叩き痕、内面に同心円文がみられる。焼成は良好で、青灰色を呈する。これらは小片のため不明確ではあるが8~9世紀代のものであろうか。

土師質土器はP28内から4点(第7図3~5)、P38内から1点出土したほか数点存在する。3は



第7図 山代郷正倉跡出土遺物実測図

口径7cm、底径5.5cm、高さ1.4cmの皿である。底部は糸切りのままである。体部が細く、口径と底径の差が少ないので大きな特徴。焼成は良好で赤褐色を呈す。4は口径7.6cm、底径6cm、高さ1.4cmの皿である。底部は糸切りのままである。全体のつくりや器形は3に類似しているがひとまわり大きい。焼成は良好で赤褐色を呈す。5は口径6.2cm、底径4.1cm、高さ0.9cmの皿である。体部の立ち上がりがゆるやかで、3・4とはやや形態が異なる。底部は糸切りのままである。焼成は良好で、赤褐色を呈する。図示していないがP28内、P38内から出土した土師質土器皿はもう少し器高が高くなるものである。土師質土器の編年については当方では確立されていないが、黒田畠遺跡土居第IV調査区などで類似のものが出土していることから13~14世紀ごろと推定されよう。⁽¹⁾

陶磁器類は少量出土したがいずれも近・現代のものと判断されたため図示していない。このほかに古錢として寛永通寶が1点出土している。

4.まとめ

今年度の調査によって検出した造構は、溝状の落ち込み(SD01)1条のほか、柱穴あるいはそれに類する落ち込み約60個である。調査範囲が狭かったこともあり明確な建物跡等を確認できなかつたが、2間×2間以上と考えられる南北棟建物跡を1棟(SB01)推定することができた。このほか東西方向に並ぶ柱穴列(SA01)も1条推定できた。これらはいずれも梢円形あるいは隅丸長方形の柱掘り方をもつものであった。柱穴内から遺物が出土していないため時期については

不明である。P28 内からは13~14世紀代の土師質土器皿が出土しており、中世の建物跡の存在が判明したが、建物規模や性格等については把握することができなかった。SD 01 は柱穴群より後から掘り込まれたものであったが、掘削の時期については明らかにできなかった。

ところで、今年度調査区の東側には国指定史跡である出雲国山代郷正倉跡がある。最後に本年度調査区と山代郷正倉跡の関連について若干の所見を述べておく。調査に先立って最大の関心事の1つは、本年度調査区内において正倉跡の西限を画する遺構が確認されるかどうかという点であった。調査の結果は、区画を示すような明確な遺構は検出できなかった。また、8~9世紀代とみられる須恵器片は数点出土したものの、正倉に関連するような奈良時代の建物跡等も確認できなかった。

それでは、この地は正倉跡との関連でどのような地域にあたるのであろうか。現状では正倉域外になる可能性と正倉域内である可能性の二通りが考えられる。

正倉跡で調査された東側の倉庫群と西側の倉庫の中間点から東西に180メートルとて東西一町を想定すると⁽⁴⁾、西限は国道432号線の西端部であることから本年度調査区は正倉域外ということになる。地形的にみてもこの東西一町の範囲がほぼ平坦になっており、段丘はそのあたりから東西に向かってそれぞれ相当低くなるのである。ところが1987年に松江市教育委員会によって調査された下黒田遺跡では正倉跡の南方約100mのところで東西に走る大溝が確認され、その東方にある「黒田館跡」では南北に走る8世紀代の溝が調査されている。これらが正倉の南と東を画する遺構と考えて、松江市教育委員会では正倉域を南北約200m、東西約180mと推定している⁽⁵⁾。ただし、このように長方形に推定した場合、西側と東北側は完全に谷部（水田中）にあたることになり、やや不自然な感を与える。方向や年代などから下黒田遺跡と黒田館跡で検出された溝は正倉に伴う可能性が高いものと思われるが、これらの溝は段丘の崖まで達した部分からは自然地形に沿うものになるのではないかろうか。とすれば南限と東限の南半部はきちんととした溝によって画されているが西限と東限の北半部については段丘崖の自然地形を利用したものとも考えることができる。なお北限については不明である。このように考えるならば本年度調査区は正倉域に含まれることになろう。

いずれにしても、今後周辺の調査を丹念に継続することによってはじめて明確になるものと思われる。

（松本岩雄）

註（1）鳥取県教育委員会「史跡出雲国山代郷正倉跡」 1981年

（2）鳥取県「出雲開発地域土地分類基本調査松江」 1974年

（3）鳥取県教育委員会「風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書」 1982年

広江耕史「鳥取県における中世土器について」『松江考古』第8号 1992年

（4）注1と同じ

（5）松江市教育委員会「下黒田遺跡発掘調査報告書」 1988年

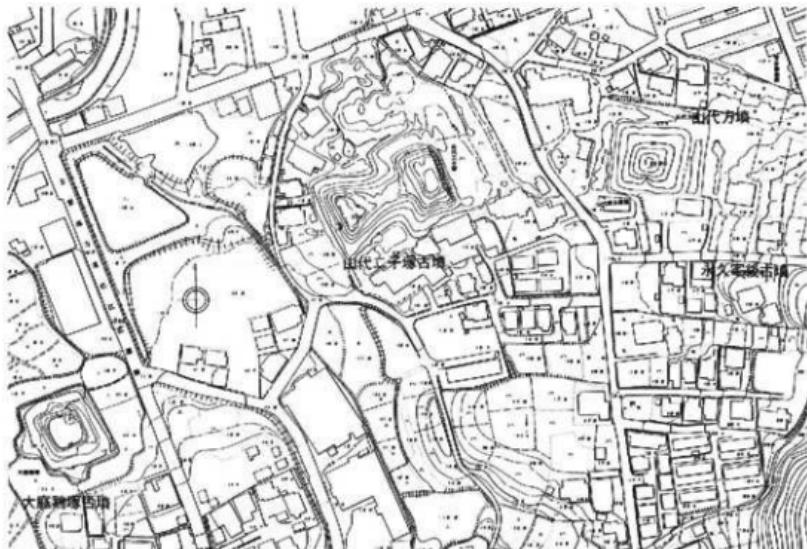
IV 山代方墳発掘調査

1. 調査区の設定と調査の経過

古墳の状況 山代方墳は松江市山代町字二子塚に所在し、茶臼山北西麓に派生する低台地上に位置する。同じ低台地上には西側に県下最大の前方後方墳である山代二子塚古墳、南東側に永久宅後古墳が隣接して位置し、当古墳より約300m 南西に位置する大庭鶴塚古墳と共に県下最大級の古墳群である山代・大庭古墳群を形成している（第2図）。

当古墳の位置する大庭・山代町周辺は、松江市中心部の郊外に位置するといった地理的環境から県内でも近年最も市街化の進行している地域のひとつであるが、古墳の遺存状況は比較的良好であるといえる。現状においても方形プランの二段築成の墳丘が明瞭に観察できる。周溝部分は、南側は近年の宅地化によって地形が大きく改変されており、当時の状況は望むべくもないが、その他の部分については築造当初の面影を色濃く残している（第8図、PL 7-1）。

本古墳については、從来周溝の外側に周堤（土塁）がめぐっていたと報告されているが、既に指摘されているように現状ではその痕跡は明確には観察できない。古墳の北、南、西側については現



第8図 山代方墳と周辺の古墳 1:3000

在宅地として利用されている為、周堤の存在を積極的に見いだすことはできず、わずかに宅地化を免れている北西部についても、現在の地形は緩やかに北側へ傾斜しており、表面観察で周堤部分とその外域を区分する傾斜変換点を見い出すことは困難な状況にある。唯一破壊を免れている東側については、一見周堤状の高まりがあるように観察されるが、これは現在南北に走る私道によって周堤状と思われるの高まりの外側がカットされた為生じた結果によるものと思われる。よって、この周堤状の高まりがはたして築造当初から意識されて築造されたものなのか、それとも古墳築造当初は周堤の築造は意識されておらず、周溝を掘削する過程において生じたものなのかを明らかにすることが今回の調査の目的の一つであった。

調査区の設定と調査の経過 このような問題点を鑑み、平成4年度の調査は、当初現在国史跡指定地外である墳丘南側の山代原公民館敷地内と同じく南東部の畠地、及び東側、北東側について調査を実施し、周堤の外側及びコーナーの確認を行う予定であったが、土地所有者の都合等により東側及び北西側については調査を断念せざるを得ない状況となった。よって当初の予定を変更し国史跡指定地内において土地所有者の承諾の得られた古墳東西部及び指定地外の古墳南西部にそれぞれトレントを設定し、墳丘・周溝の規模を確認し、将来的な整備のための基礎資料を得ることを目的として調査を実施した（第9図）。

第1トレントは現在宅地となっている古墳南西部に設定し、周溝、周堤の残存状況の確認を目的とした。第2トレント、第3トレントは指定地内である墳丘東西部にそれぞれ設け、墳丘、周溝の規模の確認、及び部分的に断ち割り調査を行い、墳丘及び周堤の築造過程を明らかにすることを目的として設定した。

第2、第3トレントにおいては当初設定した区域内では墳丘端を確認することができなかつたため、それぞれ墳丘寄りに若干トレントを拡張した。最終的な調査面積は第1トレントが28m²、第2トレントが26m²、第3トレントが20m²の合わせて74m²である。発掘調査作業は第1トレントを11月12日から開始し、11月18日に第1トレントについては調査を終了した。そして一端中断したあと、指定地内における現状変更が許可された後の1月12日から第2、第3トレントについて調査を再開、2月5日に現地調査をほぼ完了した。

遺物整理作業は現地調査開始と共に現場と併行して実施し、併せて報告書作成作業を行った。また、現地調査中及び終了後に島根県文化財保護審議会会長・山本 清、同委員・池田満雄、明治大学教授・大塚初重、島根大学教授・渡辺貞幸の4先生及び文化庁・松村恵司調査官に現地調査及び今後の整備方針などについて指導いただいた。また、地山と盛土の区分、地山の性質などについて地質学的方面からの指導を島根大学教育学部教授・三浦 清先生に指導をお願いした。

(池淵俊一)

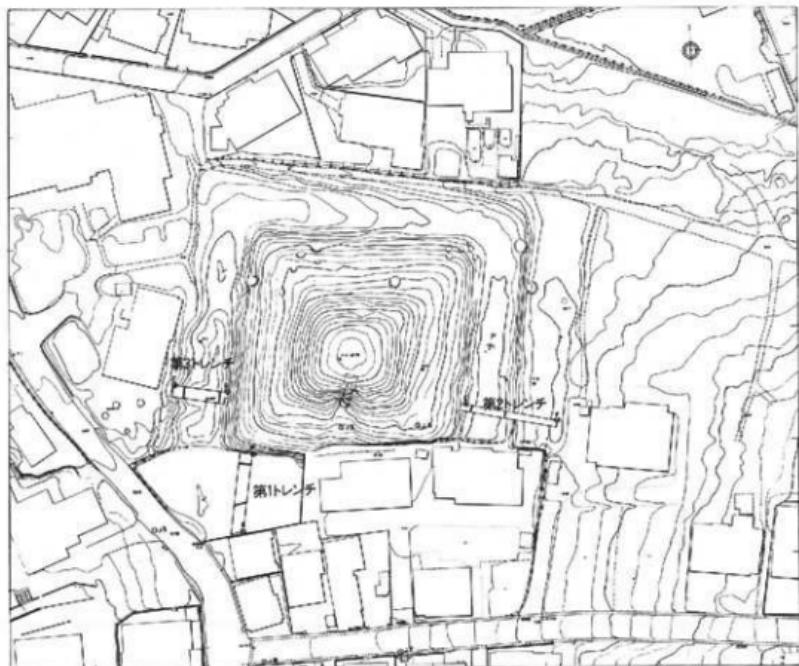
2. 調査の結果

(1) 第1トレンチ

第1トレンチは、墳丘南側の現在公民館敷地として利用されている地区に、周溝及び周堤の残存状況を確認する目的で設定した、長さ14m、幅2mのトレンチである。調査の結果、現在の表土下約1m付近で墳丘南辺の墳端と幅7.1mの周溝及び周堤の基底残存部を検出した。

墳堀は後世の宅地造成によってかなり削平されており、高さ約25cmほど残存しているのみであり、その立ち上がりは現状で約30°で、比較的緩やかな傾斜をなす。周堤部についてもその大部分については削平されていたが、基底部の約60cmほどが残存しており、周堤の立ち上がり角度は約53°を測る。周溝底面はほぼ平坦な状況を呈し、底面レベルは墳堀付近で14.56m、中央部で14.40m、周堤立ち上がり付近で14.34mを測る。

周溝底面は地山である黄褐色ブロック土をベースとして削り出しによって築造されており、周堤部分についても、一部断ち割り調査によって確認したところ周溝底面と同様の黄褐色ブロック土を



第9図 山代方墳調査区配図 1:1000

削り出して形成していることが判明した。この黄褐色ブロック土については、明言はできないがそのレベルからみて、後述する第3トレンチで検出した周溝底面と同様なものと思われ、乃木粘土層に相当するものであると考えられる。

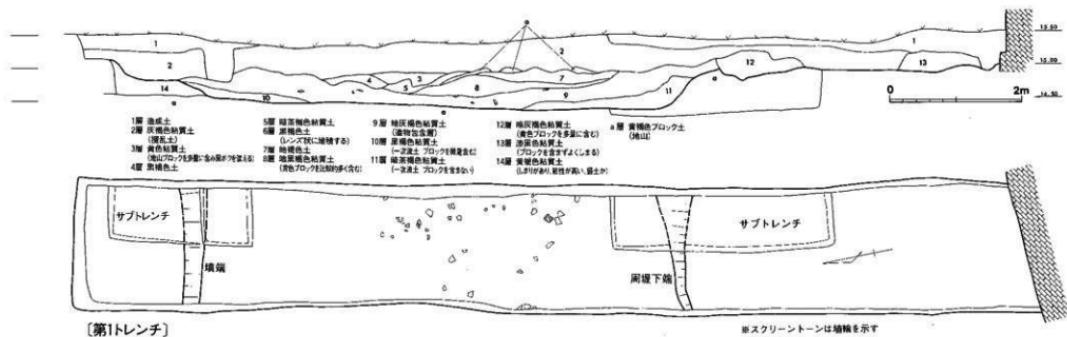
一方、墳裾部については周堤部と同様に断ち割りを実施したところ、周溝底面で認められた黄褐色ブロック土が墳丘側にそのまま水平に延びており、その上に单一の黄褐色粘質土がのっている状況が観察された。この黄褐色粘質土は黒色土などを含まない純粋な土であり、一見盛土としては認めがたい土である。しかし、ほぼ同じレベル対応する周堤部は周溝底面と同様の黄褐色ブロック土を削り出すことによって形成されているのであり、この黄褐色粘質土を地山の一部とした場合、わずか数m離れた地点で地山の堆積状況が大きく異なるといった、不自然なものとなる。よって、ここでは断定はできないが、この黄褐色粘質土が盛土である可能性を指摘しておきたい。この場合、墳裾付近で実施した断ち割りでは旧表土に相当すると思われる黒色バンド層は全く認められなかつたことから、仮に先の黄褐色粘質土が盛土だとするならば、当古墳を築造する際には先ず、黄褐色ブロック土層まで掘り込んで周溝、周堤部を造りだし、一方墳丘部分については一旦周溝部と同じレベルまで掘り込んで水平に地均しを行い、その上に盛土をしていった工程が想定される。

周溝内の土層の堆積状況は、先ず墳裾・周溝立ち上がり付近に墳丘・周溝両側から流入した状況で黒色系の土が堆積し、次いで暗灰褐色土、暗黒褐色土(黄色ブロック土を含む)、黄色土の順で凹面状に堆積しており、部分的に黒色土がレンズ状に堆積している。墳裾・周溝立ち上がり付近に一次流土として黒色系の土(黒ボク)が堆積している状況は、第2トレンチ・第3トレンチにおいても共通して認められる現象である。

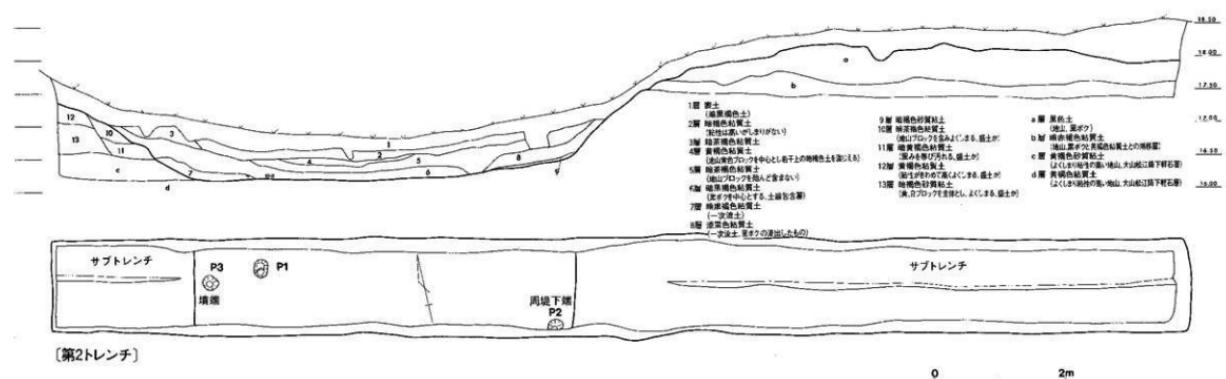
出土遺物は、周溝内の堆積土中より比較的多量の須恵器と若干の円筒埴輪および表土中より近世のものと思われる陶器を若干検出した。

これらの遺物は--次流土である黒色系の土を除く表土下各層から出土したが、その大部分は二次流土である暗灰褐色土中より出土したものであり、周溝底面直上からは遺物は検出されていない。これらの遺物は周溝中央から周堤寄りにかけて幾つかのグループにまとまった形で分布し、周溝底面から約10~20cm浮いた状況で出土している。出土状況からみて、これらの遺物は古墳築造後若干時間が経過した後、主として周堤部より流入したものである可能性が高い。

須恵器は、大部分が脚付子持蓋の破片であり、これらは比較的焼成の良好なものが多く後述する第2トレンチ出土の脚付子持蓋とは対照的である。その他若干の大甕の破片などが認められる。円筒埴輪は出土点数はわずかだが、これらの須恵器と混在するような状況で出土しており、須恵器と同様当古墳に伴うものであるといつてよいと思われる。



[第1トレンチ]



[第2トレンチ]

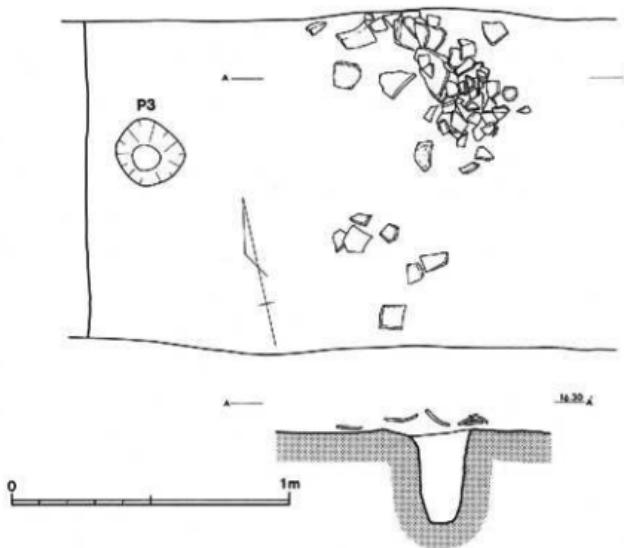
(2) 第2トレンチ

墳丘東側の墳裾から周堤状高まりの東端付近にかけて設定した、 $1.5\text{ m} \times 16\text{ m}$ のトレンチである。墳端、周溝、周堤の大部分を良好な状態で検出した。

墳裾付近での墳丘の立ち上がり角度は35°、同じく周堤の立ち上がり角度は40~50°であり、第1、第3トレンチとほぼ似た状況である。周堤底面の幅は5.70mであり、第1、第3トレンチ比較して約1.5m程狭い。周溝底面は若干東側の周堤端部に向けて上がり気味となっており、底面のレベルは墳端付近で16.20m、周溝中央付近で16.18m、周堤立ち上がり付近で16.50mを測る。このように、墳丘東側の周溝底面レベルは、第1、第3トレンチと比較して約1.8m高いところに位置する。

周溝及び周堤については、一部断ち割り調査を実施した結果、地山削り出しによって築造されていることが判明した。周溝は黒色土、漸移層を掘り抜き、その下層であるところの大山松江降下軽石層中にその基底面を設定している。周堤部については地山である黒色土（黒ボク）を削り出し、その上面としている状況が観察された。周溝底面から周堤上面までの現状での高さは約2.0mを測る。

一方、墳丘は純粋な黄褐色砂質粘土（大山松江降下軽石層）の上に暗褐色砂質粘土（13層）、



第11図 第2トレンチ須恵器実測図

黄褐色粘質土（12層）及び暗黃褐色粘質土（11層）、暗茶褐色粘質土（10層）の順で堆積している状況が観察された。この四層は12層を除き地山ブロックを主体とした土で、明らかに地山とわかるC層（大山松江降下軽石層）とは一線を画すものであったが、盛土とも認めがたいものであった。そこで島根大学教育学部の三浦清教授に地質学的鑑定をお願いしたところ、自然の堆積とは考えにくいという指摘を受けた。仮にこれが盛土だとするならば、当古墳の墳丘はその大部分について

では盛土で構築されていることとなる。なお旧表土に相当するものは一切認められなかった。

周溝内の埋土はまず、周溝両端付近に黒色系の土が流れ込み（6～8層）、次いで暗茶褐色粘質土（5層）、黄褐色粘質土（4層）の順で堆積している。このうち8層は周堤上部の黒フク（a層）とほぼ同じ土であり、周堤上部の土が比較的早い段階に流れ込んだものである。

遺物は比較的多量の須恵器と若干の埴輪を検出した。埴輪は2破片検出したのみで、いずれも表土中からの出土である。須恵器はその大部分が脚付子持壺であり、埴輪付近の周溝底面のほぼ直上から数個体分となりまとまった状態で出土した（第11図）。その出土状況からみて、古墳築造直後に転落したものか、もしくは元来その位置に据えてあった可能性が考えられる。土器窯は大きく2つのグループに分かれ、北が子持壺、南が大甕である。当トレンチ出土の脚付子持壺は第1トレンチのそれと異なり、焼成の甘いものがその大部分を占める。

なお、周溝底面において埴輪寄りに2基、周堤立ち上がり付近に1基の計3基の小ピットを検出した（第10、12図）。このうちP1は28×21cmの楕円形の土坑で、深さ32cmを測る。埋土は上から黒褐色粘質土、暗黒褐色粘質土、暗褐色砂質粘土の順で堆積しており、1層の黒褐色粘質土は周溝埋土の最下層の暗黒褐色粘質土（6層）に比較的近い。このピットは土器窯の直下に位置し、当初子持壺の掘り方である可能性も考えられたが、ピットの規模が小さい点、埋土中に須恵器片が全く認められないことからみて、須恵器流入以前のものと思われる。P2はトレンチ南壁付近で検出したもので、径23cm、深さ27cmを測る。埋土は2層あり、上から暗褐色粘質土、黒褐色粘質土の順で堆積している。遺物はいっさい検出されず、その性格については不明といわざるをえない。

(3) 第3トレンチ

墳丘西側の墳丘裾付近から周堤上面にかかる付近までに設定した、 $2 \times 9.6m$ のトレンチである。墳丘西端及び周堤の立ち上がりの検出を目的として設定したが、墳丘断ち割り時に十分な土層観察ができなかつたため、最終的に若干東側へトレンチを拡張した。

調査の結果、第2トレンチと同様良好な状態で墳端及び周溝を検出した。周溝底面は黄色ブロック土である乃木粘土層上面をその基底面としており、第2トレンチよりさらに地山を深く掘り下げて周溝をつくり出している。周溝の幅は6.3mを測り、墳丘南側と東側の周溝の中間の規模である数値を示す。周溝底面はほぼ水平に作り出されており、そのレベルは墳端付近で14.56m、周溝中央部で14.58m、周堤立ち上がり付近で14.54mを測る。土地所有者の都合等により周堤上面までトレンチを延ばすことができなかつたため周堤上面の高さは確認できなかつたが、第2トレンチの状況等を考慮すると、周溝底面からの高さは2m近くになるものと思われる。周堤の立ち上がり角度は約47°を測る。

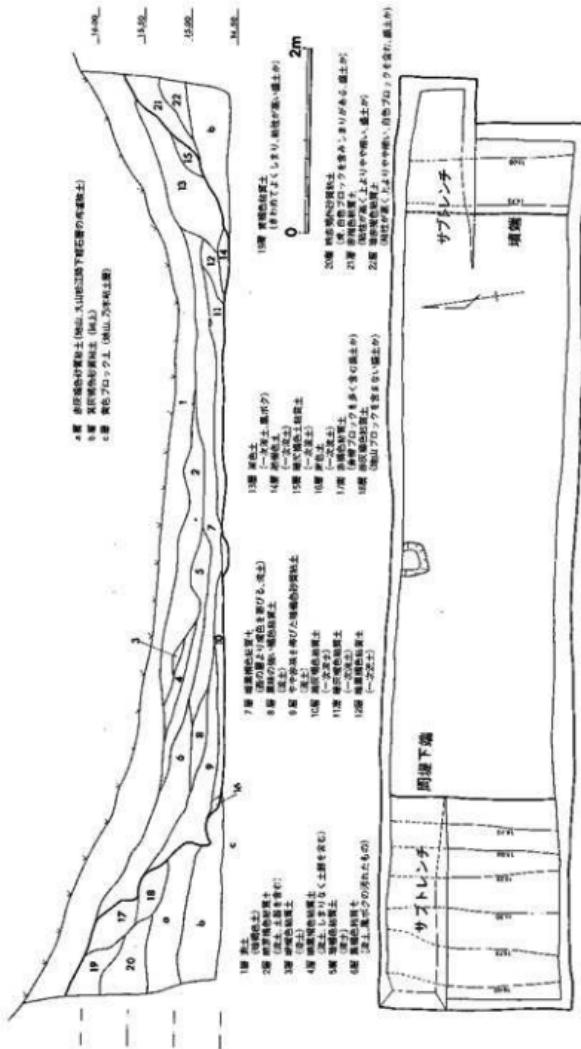
他のトレンチと同様、第3トレンチについても墳丘、周堤部について断ち割り調査を実施し、両方とも地山を削り出してその基底部をつくり出し、その上を盛土によって墳丘を築造している可能性が高い。墳丘部から説明すると、まず周溝底面から約50cmの高さまでは地山であるb層（大山松江降下蛭石層）を削り出して基底部とし、その上に暗赤褐色粘質土（22層）、赤褐色粘質土（21層）の順で盛土を行っている。なお墳端付近はきちんと乃木粘土層上面まで削り出しておらずやや暖昧となっており、傾斜変換点を墳端としたが若干墳端が西になる可能性もある。

周堤部は、墳丘部と同様、大山松江降下蛭石層（a、b層）を周溝底面から約80cmの高さまで削り出して基底部とし、その上に地山ブロックを多量に含む暗赤褐色砂質粘土（20層）、地山ブロックを含まない黄褐色粘質土（19層）を盛り上げ、赤灰褐色粘質土（18層）、赤褐色粘質土（17層）を盛り付けて周堤表面を整えている様相が観察された。この17～20層の四層は地山である灰褐色砂質粘土（a、b層）とは明らかに異なるが、一見地山と見間違える堅く締まった土である。

周溝内の堆積状況は、まず暗灰褐色粘質土が底面にうすく堆積し（10層）、次いで黒色～暗褐色系の土が墳裾、周溝立ち上がり付近に比較的厚く堆積している（9、13層）。特に墳裾付近の黒色土（黒ボク）は第2トレンチの周堤立ち上がり付近の状況と類似し、墳丘表面が比較的早いうちに流出したものと推測される。これらの一次流上からは遺物は殆ど出土していない。その後暗褐色～黒褐色系の土が凹状に順次堆積している（2、5、7層）。

遺物の出土状況は、すでに述べたように周溝床面直上からの出土ではなく、主として二次流土と思われる暗黒褐色粘質土（2層）を中心として出土した。遺物は脚付子持壺を中心とする比較的多量の須恵器のほか若干の埴輪が認められた。

（池淵俊一）



第13図 第3トレンチ実測図

3. 遺物

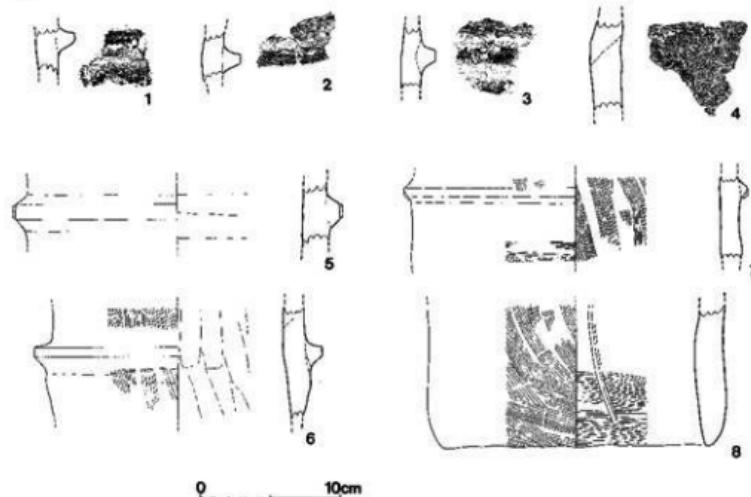
(1) 墓輪

墓輪は各トレンチから出土したが、いずれも小破片であり全体で10点ほどしか出土していない。これらの墓輪は1点(図14-8)を除き全て表土中からの出土である。出土した墓輪は現在のところ形象墓輪、朝顔形墓輪と確実に呼べるものはない。また今回の調査で出土したものは全て土師質のもので、須恵質のものは認められなかった。

第14図1は第1トレンチ表土中からの出土したもので、赤褐色を呈し、焼成は比較的良好である。タガは断面台形で比較的突出度が高い。4は第3トレンチの表土中より出土したものである。器壁は厚い部分で2.4cmを測り、かなりぶ厚い。2条の細い沈線が走りその間にのみ一次調整のタテハケが認められる。この沈線はタガを貼りつける際の割付線であった可能性も考えられる。

5はやや幅広のタガを持つもので、第1トレンチの表土中より出土したものである。タガは比較的突出度の低いものと思われる。赤褐色を呈し、内面には粘土紐の接合痕が明瞭に観察できる。調整は風化が著しく内外面とも不明。

6は今回の調査で出土したものの中では比較的大きな部類に属する破片で、第2トレンチ表土中より出土したものである。黄褐色を呈し、器壁は1.5cmを測る。タガは断面台形の比較的突出度の高



第14図 墓輪実測図

(1・5・8 第1トレンチ出土 2・6 第2トレンチ出土 3・4・7 第3トレンチ出土)

いもので、貼り付け痕が観察できる。調整は外面が一次調整のタテハケ、内面は板状工具もしくは指頭による粗いナデ調整で仕上げる。

8は底部の資料で、第1トレンチの周溝底面から他の須恵器等とともに若干浮いた状況で出土したものである。赤褐色を呈し、器壁は厚い部分で2.2cmをはかり4と同様かなり器壁が厚く、底部にむかって断面が先細り状となる。底部調整は内外面ともハケメによって行われているが、底端部はカットもしくはナデ等の調整は認められず、平坦面を形成しない。

(2) 須恵器

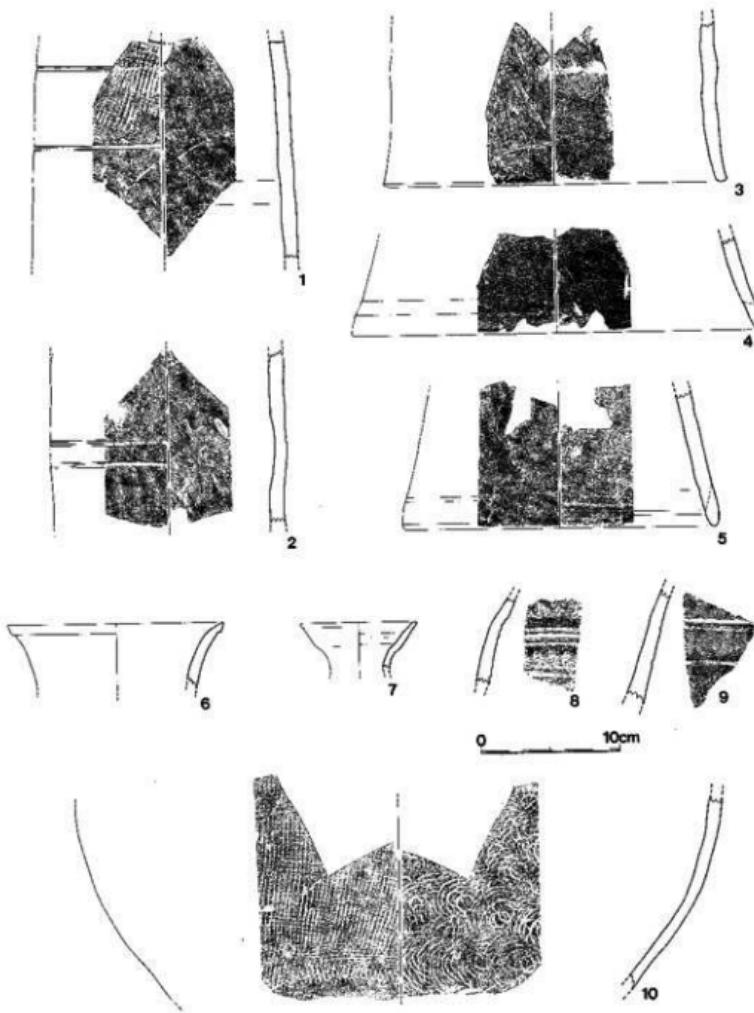
須恵器は各トレンチとも比較的まとまって出土している。その大部分は子持壺と大甕で、蓋坏等他の器種は全く出土していない。第15図は第1トレンチ出土の須恵器である。1は脚の中間部の破片で、比較的焼成の良好なものである。2条の沈線がめぐり、上部にスカシ(形状、数は不明)の一辺が認められる。外面は格子目風の平行タタキのち、ヨコナデ調整。内面はヨコナデで仕上げる。2も1と同様子持壺の脚部の破片で、1と同じく淡青灰色を呈し焼成の良好なものである。外面は粗い縦方向のユビナデを施したのち幅1cmの間隔で2条の浅い沈線が施されており、最終的なヨコナデ調整は施されていない。内面は粗い縦方向のユビナデの後、一部ヨコナデを施す。

3~5は子持壺の脚端部の破片である。3は脚端があまり開かず、端部は丸く収めるが若干面をもつ。外面の調整は上方が粗い縦方向のユビナデ、脚端付近はヨコナデを施し、内面は大部分がヨコナデで仕上げてある。4は下方にむかってやや開くタイプのもので、脚端部外面は若干肥厚し踏張り気味となる。脚端は丸く収めるが若干平坦面をもつ。調整は内外面ともヨコナデを施す。5は4ほどではないが幅が開くタイプのもので、4と同様脚端付近はやや踏張り気味となり、端部は丸く収める。脚端内面には1条の浅い沈線を施す。調整は、内外面とも上方は縦及び斜方向の粗いナデ、脚端付近はヨコナデを施す。3~5は総て青灰褐色を呈し、焼成の良好なものである。

6は子持壺(観壺)の口縁部か。口縁部は外面を肥厚させて段を設け、内外面ともヨコナデ調整を施す。青灰色を呈し焼成は良好。口径は15.4cmに復元したが、小破片の為不確定な数値である。7は子壺の口縁部から頸部にかけての破片である。口縁部と頸部との境界はかなり鈍くなっているが、なお識別可能である。外面はヨコナデ調整を施し、一部タテハケ痕が認められる。焼成は良好。

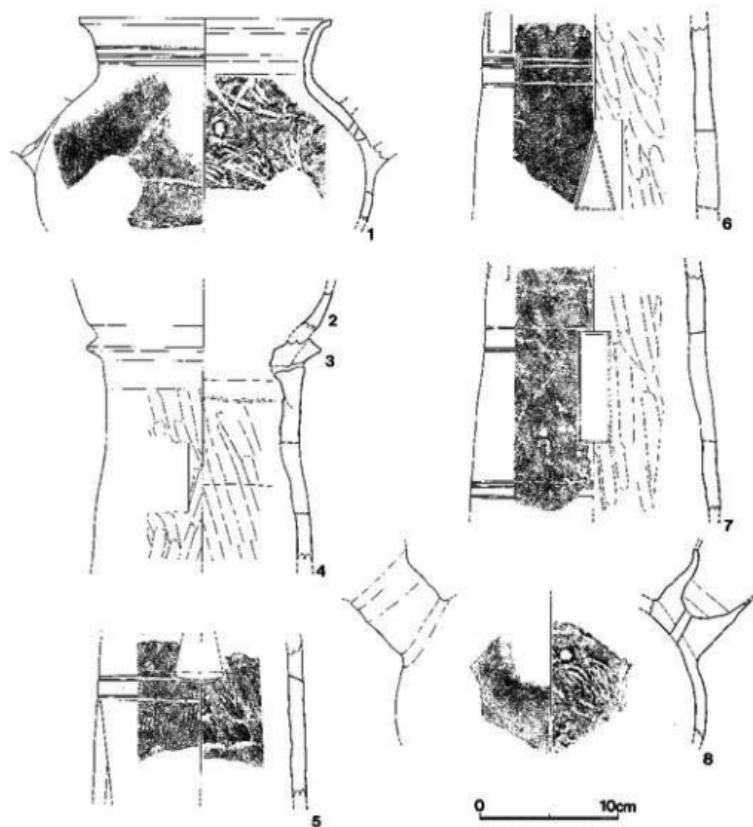
8、9は甕の頸部の破片である。8は3条1組の明瞭な沈線を二段に配し、その間をややだれた振幅の小さい櫛描波文を施す。9は2条と1条の沈線を配し、その間に振幅のやや大きい櫛描波文を施す。10は甕の胴部下半部の破片である。底部付近が一部若干凹む。外面は平行タタキのうち一部カキメを施し、内面は同心円当具痕が明瞭に残る。淡青灰色を呈し、焼成は良好である。

第16~17図は第2トレンチ出土のものである。当トレンチ出土の須恵器は第1トレンチとは対照



第15図 第1トレンチ須恵器実測図 1:4

的に焼成の不良のものが多い。1～4は子持壺の口縁部から脚部の途中までの破片で、直接接合はないがその出土状況や色調、焼成からみて同一個体である可能性が高い。口縁部は緩やかに外反し、端部は段をもつ。頸部は3条の不明瞭な沈線がめぐる。子壺は削離しており大部分は存在しない。親壺に接合後の径約7mmの穿孔が認められる。体部中央部には円形スカシ（数は不明）を穿つ。2～4は親壺下半部から脚部上部にかけての破片であるが、接合部分で削離しており、脚部と親壺及び鉢状突帯の接合工程が観察できる。これによると、まず親壺と脚部を別々につくり、脚部の接



第16図 第2トレンチ須恵器実測図(1) 1:4

合部端面は親壺が接合しやすいように幅広の受口状につくり、その中央をやや円ませてある。親壺は下半部を外反気味につくり、その下端外面に断面三角形状の籌状突帯を貼りつけたのち、脚部に接合してある。脚部上半には長方形スカシが認められるが数は不明。脚部は内外面とも粗いタテナデを施す。

5は脚部中央部の破片で比較的焼成の良好なものである。2条の沈線で上下に区画し、両方に三角形スカシを互い違いに穿つ。外面は平行タタキののちタテナデ、内面は粗いタテナデを施す。6、

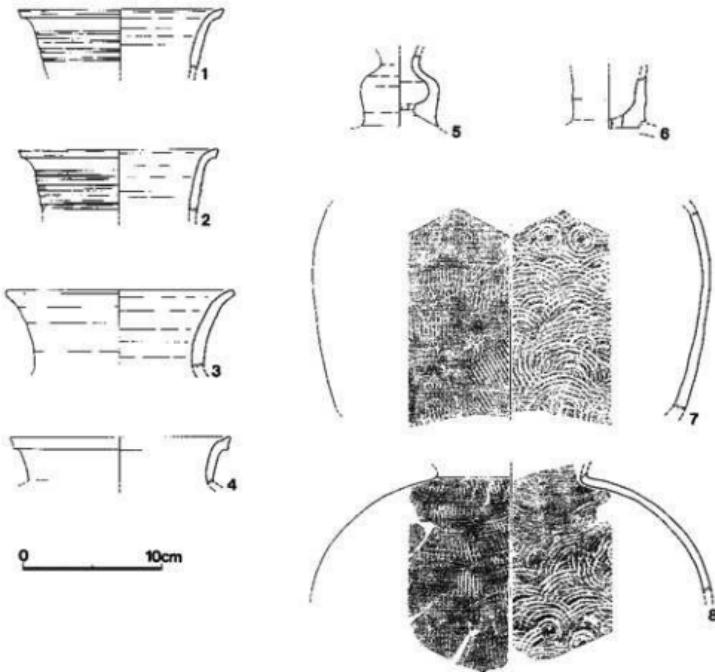
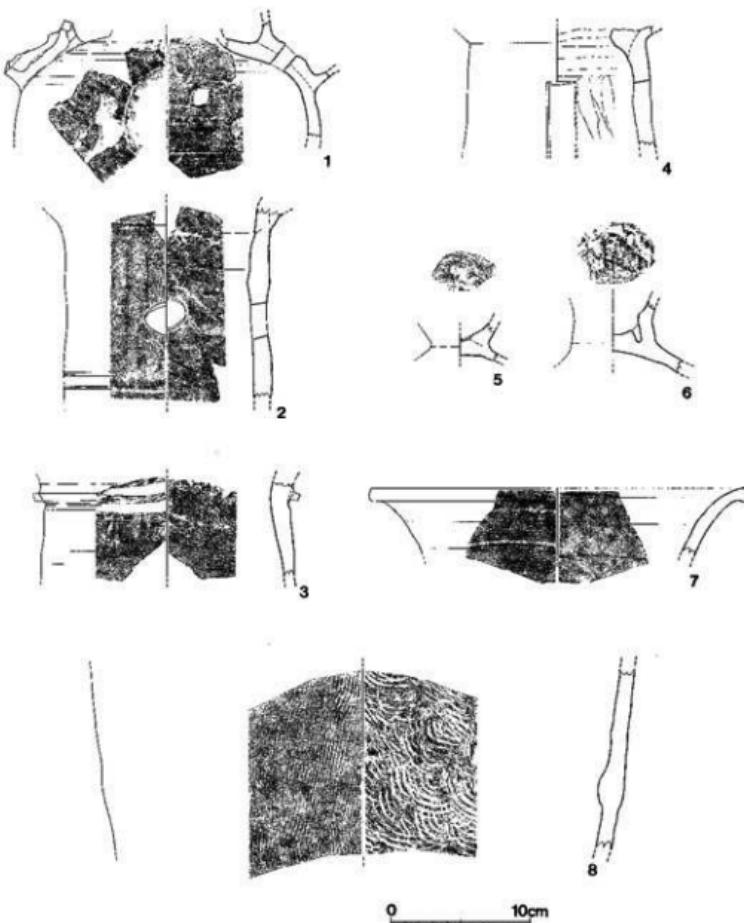


図17図 第2 トレンチ須恵器実測図(2) 1:4

7は同様に脚部中央の破片であるが、焼成が不良のものである。6は3条の沈線で上下を区画し、上段に方形、下段に三角形のスカシを互い違いに穿つが数は不明。7は2条と3条の沈線で3段に区画し、上、中段に長方形スカシを互い違いに穿つ。6、7とも外面はタタキのち粗いタテナデ、内面は粗いタテナデを施す。



第18図 第3トレンチ須恵器実測図 1:4

8は子壺がある親壺の破片で、1～4と同じく焼成の不良のものであり、淡灰褐色を呈す。子壺は底のあるもので、退化が著しく、体部、頸部、口縁部の境界はきわめて痕跡的となっている。子壺と親壺の接合後、径8mmの貫通孔を穿つ。体部に円形スカシの一部が認められる。外面は摩滅の為調整は不明だが、一部タタキ痕が認められ、内面は同心円当具痕が認められる。

第17図1、2は子持壺の口縁で、焼成の不良のタイプのものである。口縁は緩やかに外反し、端部にやや凹んだ平坦面を形成し、頸部に凹線文風の鈍い沈線を施す。3も同じく子持壺の口縁と思われるが、焼成が良好なタイプで、ラッパ状に開き、端部は丸く收める。4は壺の口縁か。焼成は良好で端部に平坦面をもち、内外面をヨコナデで仕上げる。

5は口縁を欠いた子壺で、青灰色を呈し、焼成が良好なタイプである。体部と頸部との境は鈍くなっているが、なお明瞭に識別でき、次の6と対照的である。底部下には親壺に貼り付ける際に調整したものとおもわれる指頭圧痕が観察でき、中央部には數度にわたる刺突痕が認められる。6も頸部以上を欠いた子壺で、焼成の不良なタイプである。退化が著しく進行し、円筒状となっている。底部に径6mmの孔を穿つ。7は大壺の胴部上半から下半にかけての資料である。淡青灰色を呈し、焼成は良好。外面は格子目風平行タタキのちカキメ、内面は同心円当具痕が認められる。8は壺の胴部上半の破片である。上半部内面にヨコナデを施すほかは7と焼成、調整はほぼ同じである。

第18図は第3トレンチ出土のものである。1は親壺の胴部で、焼成がやや甘いものである。親壺は肩がやや張り、子壺は底のあるものを貼りつけたのち、径1.1cmの貫通孔を穿つ。調整は内外面ともヨコナデで仕上げる。2は脚部上半部の資料であり、焼成は良好で青灰色を呈す。親壺との接合部はやや幅広につくってあり、脚部上半部には2方向に円形スカシを穿つ。下半には区画文である2条の沈線がめぐる。外面は粗いタテナデ、内面はヨコナデを施す。3も焼成の良好な脚部上半部の資料で、先端部が欠損しているが鰐状突帯が認められる。4も脚部上半部の資料だが、焼成は不良で淡黄褐色を呈す。第16図4と同様、親壺との接合部を受部状に平坦につくりだし、その上面を指頭圧により調整を施している。上半に方形スカシが認められる。

5、6は子壺と親壺との接合資料で、両者とも淡青灰色を呈し、焼成は良好である。5は子壺底部を形成しないものと思われ、内面に数次にわたる刺突痕がみられるが、親壺内面まで貫通していない。6は親壺との接合の際、子壺底部内面に粘土板を貼りつけている。中央ではなく偏って刺突が認められるが、5と同様親壺内面まで貫通していない。

7は最もしくは広口壺の口縁である。上方にむけて大きく広がり、端部は平坦面を形成する。口径26.6cmに復元したが、小破片の為不確定な数値である。8は大壺の胴部下半部の資料で、内外面の調整は第17図7と同じである。

4. まとめ

(1) 墳丘について

今回の調査は周堤部の規模とその範囲について確認をすることが主たる目的であったが、諸般の事情により墳丘東西部及び南側については周堤外域部まで調査区を設定することができず、また北側については全く調査を行うことができなかった。

このように本来の目的からすれば、極めて不十分な調査とならざるをえなかつたが、それでも周溝の形状及び規模、また墳丘・周堤の築造工程について幾つかの知見を得ることができた。ここでは今後の調査に向けての一応のまとめと課題を示しておきたい。

今回設定した3ヶ所の各トレンチでは比較的良好な状況で周溝を検出し、墳端及び周堤立ち上がりについてもほぼ押さえることができた。周溝幅は表にあげたとおり、5.7m～7.1mを測り、ややバラつきがある。周溝底面のレベルは東側周溝が16.2m、西側及び南側（南西側）周溝が14.5m前後を測り、墳丘東西部でかなりの高低差が認められる。この点については既に島根大学考古学研究室による墳丘測量調査報告の中で指摘されているとおり^①、当古墳が茶臼山北西麓から派生する小台地上に位置するという立地条件に起因するものである。周溝底面は西側・南側周溝では乃木粘土層を基底面として据えており、東側周溝はその上の大山松江降下軽石層（DMP）中に設定されている。ある地山面を基準に周溝底面を設定するという手法は隣接する山代二子塚古墳の場合にも認められ、山代二子塚古墳の場合は大山松江降下軽石層の上のマンガンバンドを周溝底面としている。

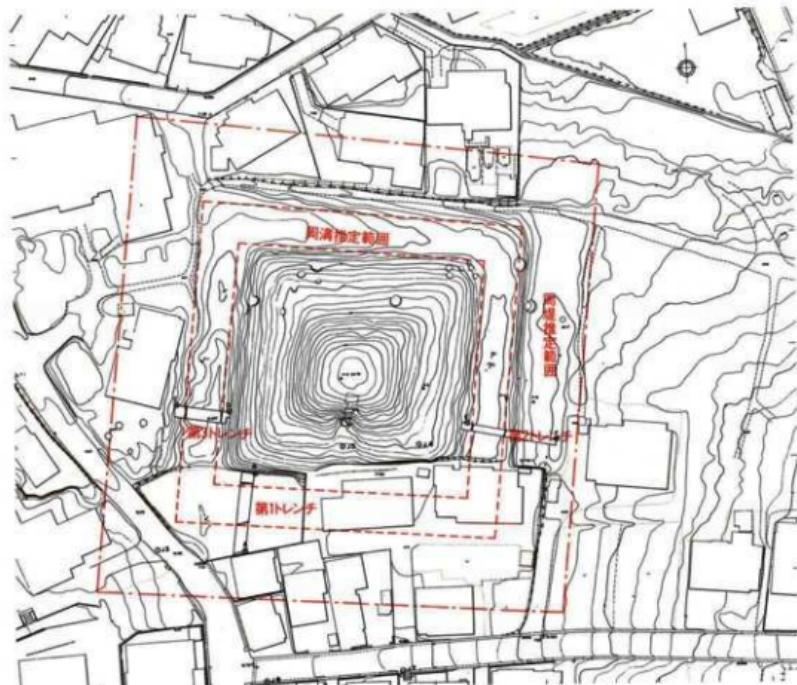
表2 各トレンチにおける周溝と周堤（計測値は概数m、下段は山代二子塚の各数値）

トレンチ	溝底標高	溝底幅	周堤との比高	周堤幅(現状)
1	14.4	7.1	(0.6)	—
2	16.2	5.7	2.0	14
3	14.5	6.3	2	—

1	14.3	6.9	1.7	15以上
3	15.0	6.7	2.2	18
6	13.3	4.5	0.5	22

る⁽²⁾。ここで当古墳の西側及び南側周溝底面のレベルと隣接する山代二子塚古墳の後方部周溝（3トレンチ）のレベルを比較すると、二子塚の方が約50cm高い位置に周溝底面を設定している。立地条件からみて当古墳の方がやや高いところに位置することから、当古墳の場合二子塚で基準としたマングンバンドよりさらに下層の乃木粘土層に周溝底面を基準に据えるため、かなりの深さまで掘削したものと推測される。

さて、第2トレンチの墳丘部及び第3トレンチの墳丘・周堤部においては、断ち割り調査の結果、確実に地山である部分の上に盛土と思われる土層を確認した。すでに各トレンチの概要で述べたようにこれらの土層は一見地山と見間違える堅く締まった土である。仮にこれを盛土とした場合、墳丘は1段目のかなりの部分も盛土で構築されていたということとなり、墳丘1段目は旧地形を利用して多少整形して作り上げたとする当古墳に対する従来の認識⁽³⁾とは大きく異なったものとなる。ただしこれらの土層を盛土とするに問題が無いわけではない。というのは今回の調査で確認した明らかな地山と盛土状土層との境界レベルは墳丘東側で16.6m、西側で15mであるが、これを直線で



第19図 山代方墳墳丘復元想定図 1:1000

結んだ場合、石室の床面推定レベル(17.7m)より明らかに低い部分を通過することとなり、石室が盛土中に構築されていたこととなるのである。通常横穴式石室(石棺式石室)は地山を掘り込んで構築されるのが通例であり、この点からみてもこれらの土層を盛土と認定するにはなお躊躇される。墳丘築造前の旧地形が現在石室のある付近が瘤状の高まりであった可能性等も考えられようが、今回の部分的な調査で結論を導き出すのは困難であり、いずれにせよ今後の調査によって明らかにしていく必要がある。

第19図は今回の調査結果をもとにおおよその古墳の規模・形状を復元・想定したものである。ただし、墳丘北側については今回全く調査を行わなかったため、他のトレンチの所見も考慮しつつ墳丘測量図の変換ラインにそって想定したものである。また周堤幅については全く推測の域を出ないが、第2トレンチ内では周堤の外域を画する変換点を見いだせなかつた点や、山代二子塚古墳の周堤範囲などを考慮し、第2トレンチ東側を南北に走る私道がある程度当時の形状を反映して設置されたものと想定し、この周堤幅を他の部分にも当てはめて作図したものである。これによれば墳丘規模は南北が約43m、東西が45m、周溝を含めた規模は南北が約55m、東西が57m、周堤を含めた規模は一辺約81~84mを測る。これらの数値は推測の域を出ない部分もあるが今後の調査及び史跡整備にむけての一つの目安になると思われる。

(2) 出土遺物について

(a) 墳輪

今回の調査ではわずか10数点ではあるが、3つのすべて各トレンチより埴輪を確認した。すでに述べてきたように、これらの埴輪はいずれも小破片でその全どが表土中よりの出土であり、西側に隣接する山代二子塚古墳の埴輪が流入した可能性も考えられる。しかし、1点ではあるが第1トレンチ周溝底部付近から須恵器と同一レベルで確認されたことと、二子塚とは正反対の第2トレンチからも埴輪が確認されたことからみて、少量ではあるが当古墳に埴輪が伴うことは確実であると思われる。埴輪の樹立形態については、原位置をとどめるものは全く存在しない為推測の域を出ないが、その希少性からみて段平坦面全周に連続して樹立されていたとは到底考え難く、石室開口方面等特定部分に、多量の須恵器子持壺に混じて少量使用されていたと推測される。

さて、出雲地方の円筒埴輪の編年研究については、川西宏幸氏のV期編年⁽⁴⁾に依拠しつつも、タガの形態等に当地域独自の様相をもつことが明らかにされており⁽⁵⁾、特に近年においては川西V期の埴輪について底部調整を中心とした細分案が提示されている⁽⁶⁾。これらによれば、埴輪を倒立させ、底部内外面をハケメ調整を施し、最後に基底部下端を工具で平滑に切り取るものがV期の最古段階に位置付けられ(古曾志大谷1号墳例)、さらにハケメ調整を施すが基底部下端のカットを省略した

もの（山代二子塚古墳例）から、ハケメ調整でなく指や板によるナデ、オサエ調整を施すもの（岡田山1号墳例）へといった底部調整の省略化の方向での編年観が示されている。

今回の調査ではわずか1点はあるが、底部の資料が確認されている（第14図-8）。これを上の編年観に当てはめてみた場合、底部内外面をハケメ調整を施す点で、山代二子塚古墳例に近い。しかし山代二子塚古墳出土の埴輪はその大部分が、底部下端のカットこそ行わないものの、ナデ調整によって平坦面の形成を意識しているのに対し、当古墳の埴輪はそうした調整を施さず、断面がV字状を呈しており、後出的な要素をもつ。また底部の厚いつくりも二子塚例と比較すれば後出的な要素として捉えることができるのかもしれない。ただ、先の底部調整の編年観はあくまでも主体となる技法の量的な推移として捉え得るもので、1点のみを取り上げて編年的位置を論することは不可能であり、ここでは二子塚の埴輪より後出的である可能性を指摘するにとどめたい。

しかし、伴出する須恵器や墳形等の年代観からみた場合、当古墳の埴輪は出雲地方では終末段階に位置付けられるものと思われ、当地方における埴輪祭祀の終末段階の在り方を示すものとして注目される。

（b）須恵器子持壺

子持壺は、小面積の調査であったのにもかかわらず、各トレンチからかなりの量が出土した。このことからみて子持壺は墳丘全域にわたって使用されていたものと思われ、円筒埴輪に近い使用法がとられていた可能性を示唆する。子持壺の配置状況については、今回の調査での出土例はその大部分が墳丘からの流れ込みであったが、第2トレンチにおいては数個体分を周溝底面直上付近からまとまった状態で検出した。墳丘築造直後に墳丘から転落したものと考えられるが、周溝内にも子持壺が配置されていた可能性も想定され、今後の調査例の増加を待って子持壺の使用方法を検討していく必要がある。

当古墳の子持壺については、すでに早い段階に山本清氏の先駆的な研究によって氏の編年のIV期に位置付けられており¹⁷⁾、その後当古墳の採集資料を紹介した岡崎雄二郎、渡辺貞幸の両氏もほぼ同様な位置付けを行っている¹⁸⁾。今回出土した子持壺も、岡崎・渡辺両氏の紹介した資料と基本的にはほぼ同じのものであるが、焼成の比較的良好なタイプと不良なタイプの2種類に分類できる。仮に前者を1類とし後者を2類とすると今回出土したものに限って言えば、1類は子壺が口縁部、頸部、胴部の区別がなお明瞭であるのに対し（第15図-7、第17図-5）、2類はこれらの境が不明瞭で痕跡的な接線で表現されているといった特徴をもつ（第16図-8、第17図-6）。こうした点を考慮して当古墳の子持壺の大まかな編年的位置付けについて若干考えておきたい。

まず、隣接する山代二子塚古墳の子持壺と比較すると、子壺の退化の程度、脚部の調整等からみ

て、当古墳のものが後出することは疑いない。特に脚部の調整をみると二子塚のものは区画文である沈線を明瞭に施し、最終的にヨコナデで仕上げているものが大部分であるのに対し、当古墳のものは区画文の沈線が粗雑であり、ヨコナデ調整は脚端部付近に限られ大部分については粗いタテナデ調整にとどまっており、調整の簡略化傾向は明白である。また二子塚のものには鍔状突帯が存在しないことも当古墳の方が後出的であることを傍証するものであるといえる⁽¹⁰⁾。山代二子塚古墳は出土した蓋坏からTK10併行期に位置付けられている。また同様に比較的古相の子持壺としては松江市岡田薬師古墳例⁽¹¹⁾がある。岡田薬師古墳例も山代二子塚古墳例と同様に子壺はしっかりとしたりとなっており、脚部も下半部はヨコナデ調整を施し、櫛描波状文を施すなど、古式の様相をとどめている。なお岡田薬師古墳例の脚部は、裾部がハの字状に開いたのち屈曲して脚端部に至り、屈曲部内面に沈線を施しているものがある。同様な資料は今回の出土例の中にもみられるが、脚端部の踏張り、内面の沈線は痕跡的となっており、後出的であることは明らかである（第15図-5）岡田薬師古墳は6世紀中葉～後葉とされている。

当古墳出土例と比較的近似するものとしては、团原古墳⁽¹²⁾、鳥取県上野遺跡⁽¹³⁾出土の子持壺があげられる。両者の資料とも、鍔状突帯をもつ個体がある点、子壺の退化が進行しているが、なお胸部と口頸部との区分が明瞭である点、脚部の外面調整が粗いタテナデ主体となっている点等からみて当古墳出土の1類に極めて近い。ただし、当古墳出土の2類に近いものは出土しておらず、当古墳の方がやや時期が降るものと思われる。2類のような子壺の形骸化が進行しているものとしては、やや特異なタイプであるが出雲市上塩治築山古墳出土例がある⁽¹⁴⁾。

これらの点を考慮すると、大雑把な把握ではあるが、当古墳出土の子持壺は团原古墳例と同じ時期か、やや遅る時期の所産であるといえる。团原古墳からは子持壺とともに山本須恵器編年の中期末～IV期初頭に属する蓋坏・坏身が出土しており、当古墳の年代を考える上で一つの指標となると思われ、これまでの当古墳の年代に関する山本、岡崎、渡辺三氏の見解とも矛盾しない。

子持壺は、全国的な動向としては首長墓における儀礼を背景にその儀器として成立し、首長墓の消滅とともに衰退していくとされ、出雲地方は子持壺が特異な発展を遂げていった地域として理解されている⁽¹⁵⁾。言い換えれば、当地方における子持壺の特異な展開は、出雲東部を中心とした独自な古墳祭祀儀礼を成立させていったプロセスを示すものと考えられる。今後この「出雲型子持壺」⁽¹⁶⁾の分布、地域性を検討していくことは当時の当地方における古墳祭祀を紐帶とした政治組織にアプローチしていく上での一つの有力な手掛かりになると思われ、今回出土した子持壺もこうした問題を考えていく上で貴重な資料を提供したと言える⁽¹⁷⁾。

(3) 小 結

今回の調査ははなはだ不十分なものではあったが、当古墳に関する新たな知見を幾つか加えることができた。これらの新知見は当古墳が6世紀末から7世紀前葉にかけて築造された整美な周溝・周堤を兼ね備えた畿内的な大形方墳であるという従来の認識を追認させるものであるとともに、当地方独特の子持壺を多量に伴うといった強い地城性を一層浮き彫りにさせたといえる。今後この2面性をトータルに検討していくことによって、より具体的な出雲の古代史像が描きだされてゆくものと思われる。

(池淵俊一)

註

- (1) 渡辺貞幸 「松江市山代方墳の諸問題」『山陰地域研究(伝統文化)』1 1985
- (2) 島根県教育委員会 「風土記の丘地内遺跡発掘調査報告」VIII 1992
- (3) 註(1)同じ
- (4) 川西宏幸 「円筒埴輪論」『考古学雑誌』64-2 1978
- (5) 井上寛光 「出雲の円筒埴輪」『松江考古』5 1983
- (6) 長嶋康典・昌子寛光 「円筒埴輪の検討」「出雲岡田山古墳」島根県教育委員会 1987
黒田賀保 「(3) 墓輪」「古磐志遺跡群発掘調査報告」島根県教育委員会 1989
鳥谷芳雄・丹羽野裕 「(1) 円筒埴輪」「風土記の丘地内遺跡発掘調査報告」VIII 1992
- (7) 山本 清 「古墳」『島根県文化財調査報告書』5 1968
- (8) 註(1)同じ
岡崎雄二郎 「松江・山代方墳採集の須恵器について」『松江考古』5 1983
- (9) 従来、脚付子持壺に伴う鉄状突帯については粗形である器台付子持壺の器台受部のL字縁部が複数器官として変化したものとされているが(註14)、当地方における古相の子持壺にはこうした鉄状突帯は見いだせないことからみて、当地方における鉄状突帯の成立については別の要因を考えねばならないと思われる。
- (10) 島根県教育委員会 「岡田薬師古墳」 1986
- (11) 島根県教育委員会 「風土記の丘地内遺跡発掘調査報告」IV 1989
- (12) 倉吉市教育委員会 「四王寺地区遺跡群詳細分布調査報告書」 1983
- (13) 出雲市教育委員会 「塩冶地区遺跡分布調査報告」 1 1986
- (14) 岸本雅敏 「装飾付須恵器と苔長葉」『考古学研究』22 1 1975
- (15) 昌子寛光 「出雲の子持壺」『古文化談叢』18 1987
- (16) 出雲型子持壺の成立過程の検討とともに子持壺がどの段階から大量に使用されるようになるのかを明らかにする必要があると思われる。

付・大庭鶴塚墳丘測量調査

はじめに

島根県教育委員会が行ってきた風土記の丘地内遺跡発掘調査は、平成2年度より山代二子塚古墳の調査に着手し、県内でも最大級の古墳群「山代・大庭古墳群」に調査のメスがはいることとなった。これらの古墳のうち、山代二子塚古墳、山代方墳については島根大学考古学研究室により、詳細な測量図が作成されていた^①が、大庭鶴塚古墳については国土座標、標高に基づく測量図はできていないのが実態であった。そこで平成2年度の当該事業において、この大庭鶴塚古墳の測量調査を実施することとした。

測量は墳丘の各所に国土座標系による基準点を設け、百分の一の縮尺で平板測量を行った。測量は島根大学考古学研究部の絶大なる協力を得て、その後の補測を含めて平成4年度に完了した。

位置

大庭鶴塚古墳は、松江市の南郊にそびえる茶臼山（標高171.5m）の西側に広がる台地上に位置する。前記したように、付近には山代二子塚古墳、山代方墳、永久宅後古墳といった県内でも最大級の後期古墳が存在している。なお周辺の遺跡の詳細については本書第II章を参照されたい。

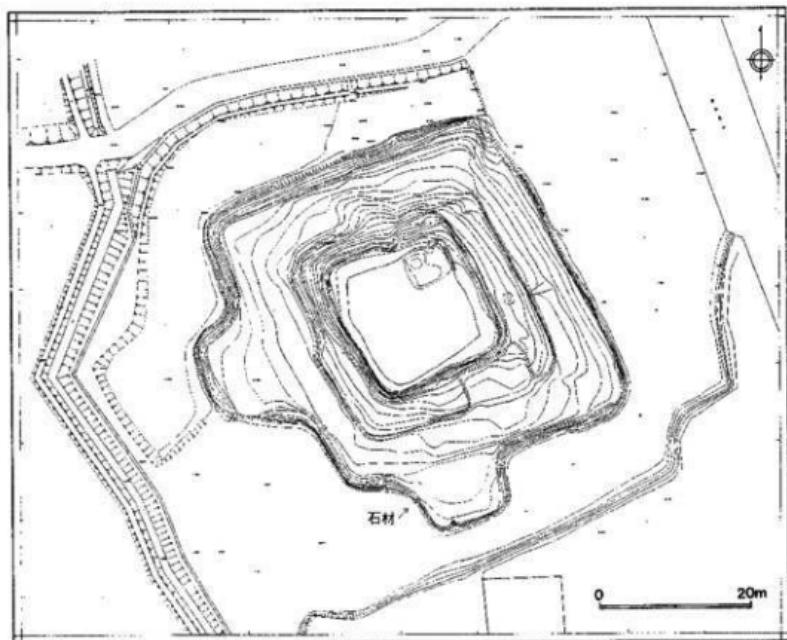
墳丘

墳丘は現状の基底部で東西辺40~41m、南北辺42~43mを測るやや菱形を呈した方墳である。しかしながら、基底部が耕作等により削り込まれていることは現状の観察でも明らかであり、昭和53年に行われた松江市教育委員会の発掘調査^②でも、現状よりかなり外側で墳丘の立ち上がりらしき加工段が検出されている。よって本来は一辺が45mを越える方墳であったものと考えられる。また見かけ上の菱形の形状も本来的なものであるかどうかは不明であるが、比較的改変の少ないと見られる2段目の北辺と西辺の角度は直角に近いため、現況ほどの変形はしていなかったものとも考えられる。

段平坦面及び墳頂に至る斜面も後世の改変が著しいが、2段築成であろう。墳頂部は現況でおよそ17m四方で、北東隅にはおよそ5×7mの周囲より少し高い部分が認められる。墳丘の高さは現況の墳裾の最低部から9m強を測る。

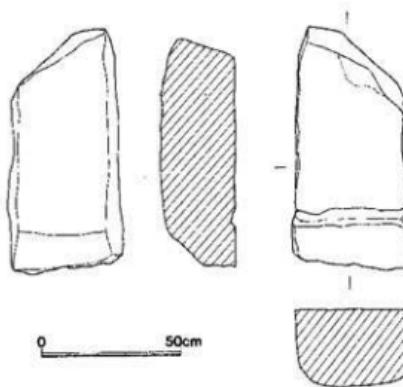
墳丘の西側と南側には造り出しが付設されている。西側のものは、現況で基底部分の幅約19m、長さが約7~9mを測るが、先の松江市教育委員会の調査で先端幅約20m、長さが12mのやや先端に向って広がる形態のものであったことがわかっている。

南側の造り出しへは、現況で基定部幅約14m、先端部幅約11m、長さが約7mを測るが、本来はもう



第20図 大庭鶏塚古墳墳丘実測図

少し大きなものであったことは明らかである。なお、今回の測量中に、この造り出しの西辺やや基底部寄りの断面に、大形の石が露出しているのが発見された。この石は角礫凝灰岩製で、長さ約85cm、幅約40cm、厚さ約26cmの角柱状を呈しており、少なくとも一面は丁寧に加工されている。他の面はかなり凹凸が激しいものの、おおよそひとつの面を形成しており、粗い加工を施しているものと推測される。丁寧に加工された面には幅がおよそ5cm内外の浅い溝が見られ、その反対面



第21図 大庭鶏塚古墳南造り出し検出石実測図

の短辺は大きく面取りをするような加工が見られる。現在この石は断面から落下しているが、抜けた痕跡を観察すると盛り土様の層の中に埋まっていたようであり、本来的な位置をそう移動していないものと考えられる。この石は何等かの目的により加工して運ばれたことは間違いない、常識的に考えれば主体部に関わるもののが可能性がある。しかし造り出しの端という位置は不自然で、しかも周囲に他に石は見当らず、現状では性格不明と言わざるを得ない。

墳丘の南側は丘陵を切るようにして形成されているため、墳外の丘陵との間にはあたかも濠のようなくぼみが見られ、これは墳丘東側に向っても続くように観察される。また墳丘の北側、西側も水田が墳丘を取り巻くように地割りされており、四周を濠が巡るようにも思えるが、先の松江市教育委員会の調査では北側、東側には続かないという。

小 結

大庭鷦塚古墳の時期は、先の調査で出土した須恵器から6世紀中頃と比定されている⁽²⁾。とすれば昨年度まで調査を行った山代二子塚古墳⁽³⁾と近い時期になる。山代方墳と永久宅後古墳とが比較的近い時期と考えられることから、山代・大庭古墳群は同時期の2基の古墳が2セットで構成されている可能性がある。出雲地方最大級の古墳群だけに、今後の詳細な調査が待たれるところである。

(丹羽野裕)

註

- (1) 渡辺貞幸「松江市山代二子塚古墳をめぐる諸問題」『山陰文化研究紀要』23 1983
渡辺貞幸「松江市山代方墳の諸問題」『山陰地域研究(伝統文化)』1 1985
- (2) 松江市教育委員会『史跡大庭鷦塚発掘調査報告』 1979
- (3) 島根県教育委員会『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告』VIII 1992



1. 山代方墳、山代郷正倉跡周辺の空中写真



2. 山代郷正倉跡 調査区遠景



1. 調査前の状況（西から）



2. 遺構検出状況（東から）



1. 造構検出状況（西から）



2. 西壁セクション



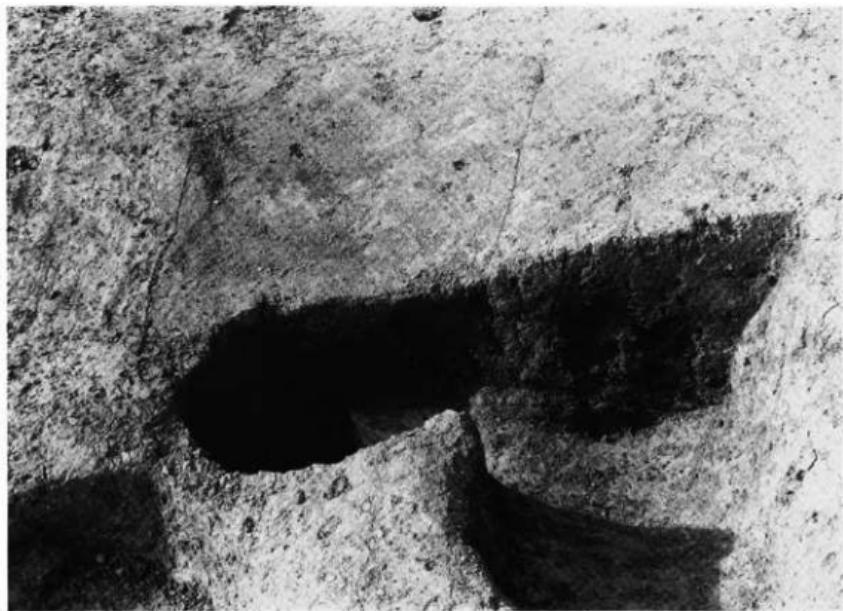
1. 北壁セクション（西半部）



2. 第1 ピットセクション



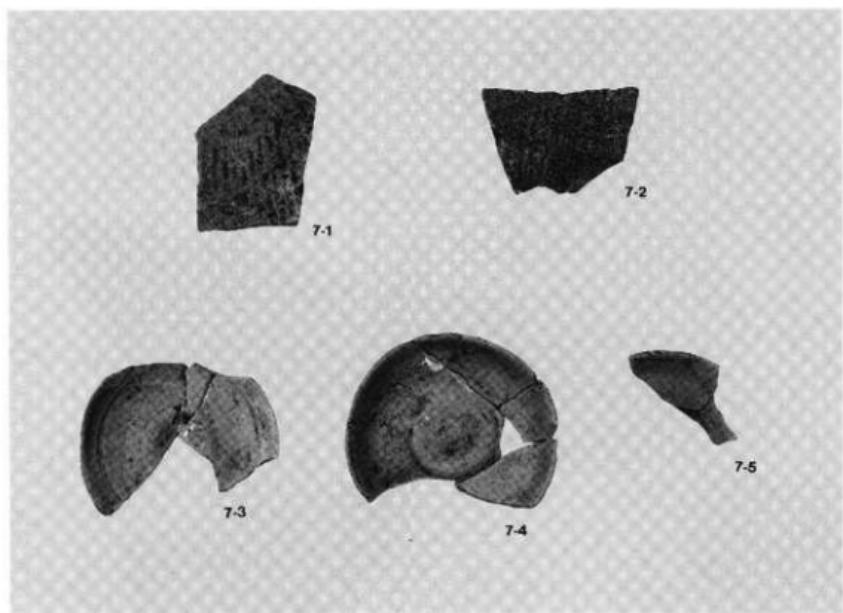
1. 第1ピット完掘状況



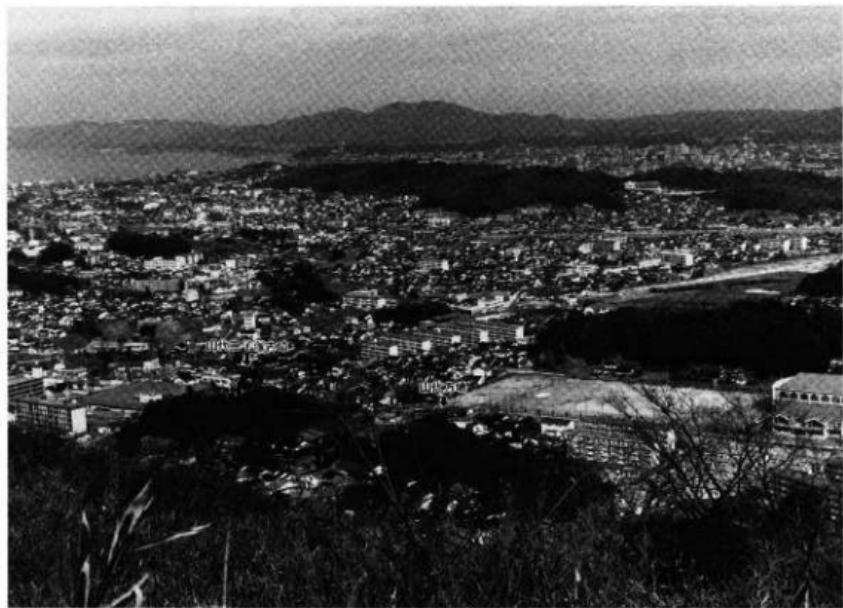
2. 第2、3ピットセクション



1. 第4 ピットセクション



2. 山代郷正倉跡出土遺物



1. 山代方墳遠景（茶臼山山頂から）



2. 第1トレンチ（北から）



1. 第1トレンチ（南西から）



2. 第1トレンチ遺物出土状況



1. 第1トレンチ東壁セクション（墳端付近）



2. 同上（周堤立ち上がり付近）



1. 第2トレンチ完掘状況（東から）



2. 同上（西から）



1. 第2トレンチ周溝遺物出土状況(東から)



2. 同上



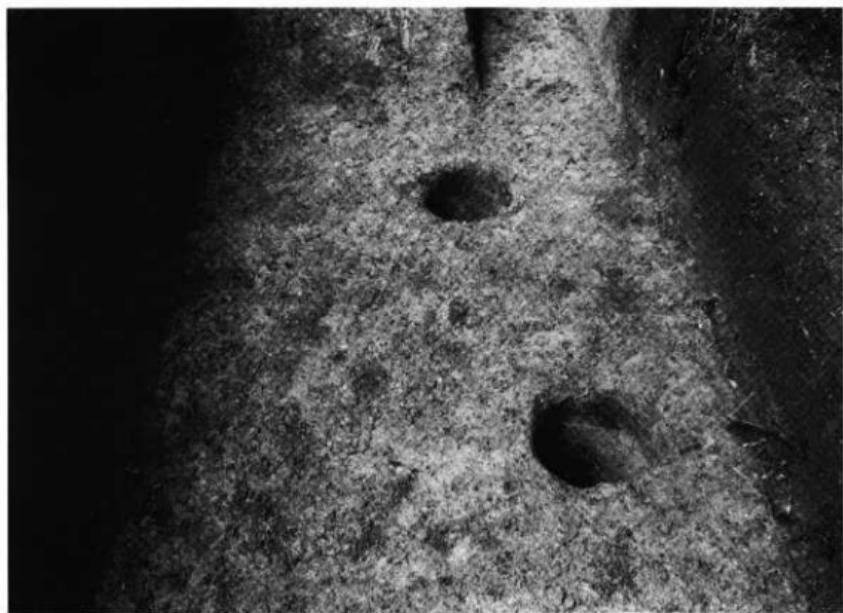
1. 第2トレンチ北壁セクション（周溝内）



2. 同上（墳端付近断ち割り状況）



1. 第2トレンチ周堤断ち割り状況（西から）



2. 第2トレンチ第1、第3ビット完掘状況



1. 第3トレンチ完掘状況（東から）



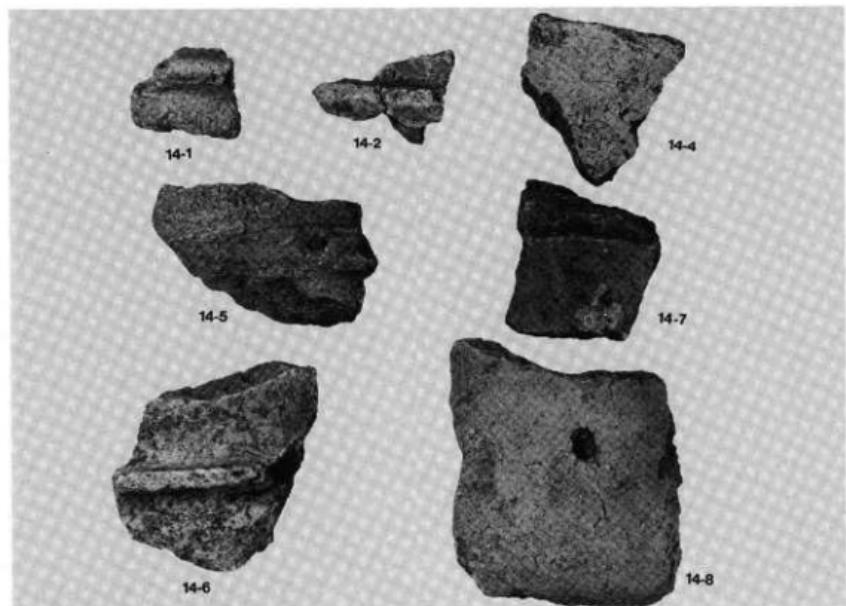
2. 同上（西から）



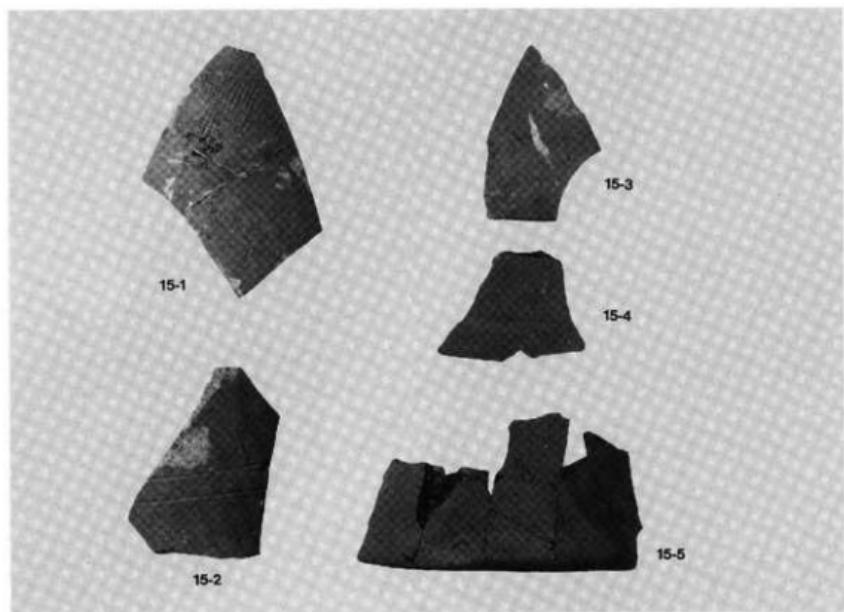
1. 第3トレンチ北壁セクション（墳丘断ち割り状況）



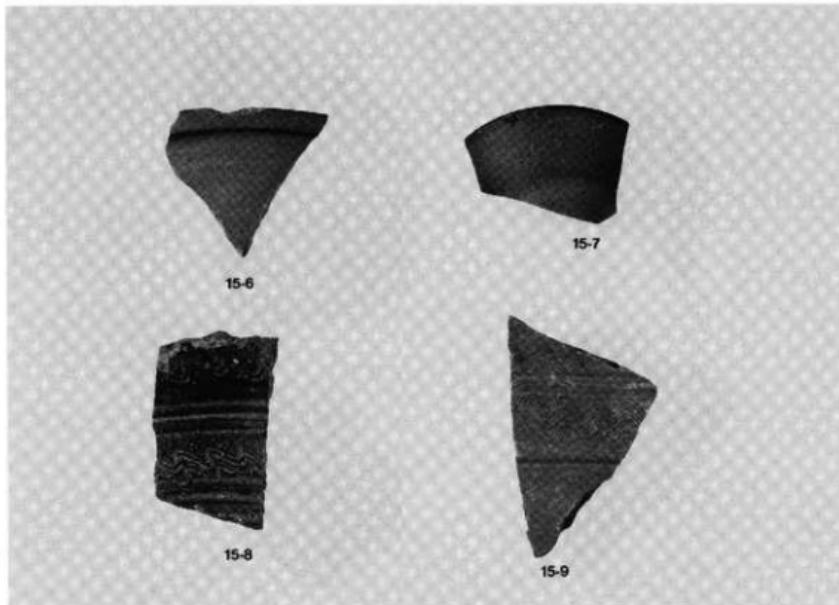
2. 同上（周堤断ち割り状況）



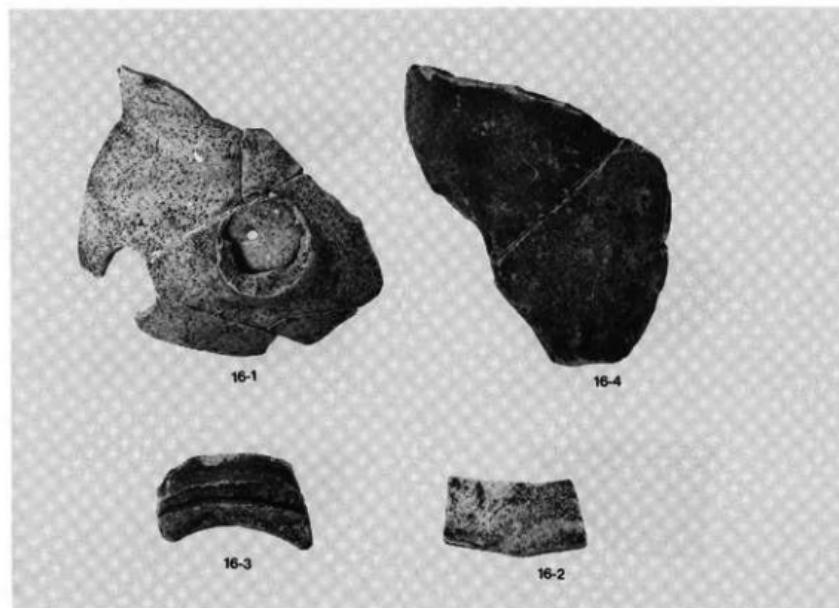
1. 山代方墳出土埴輪



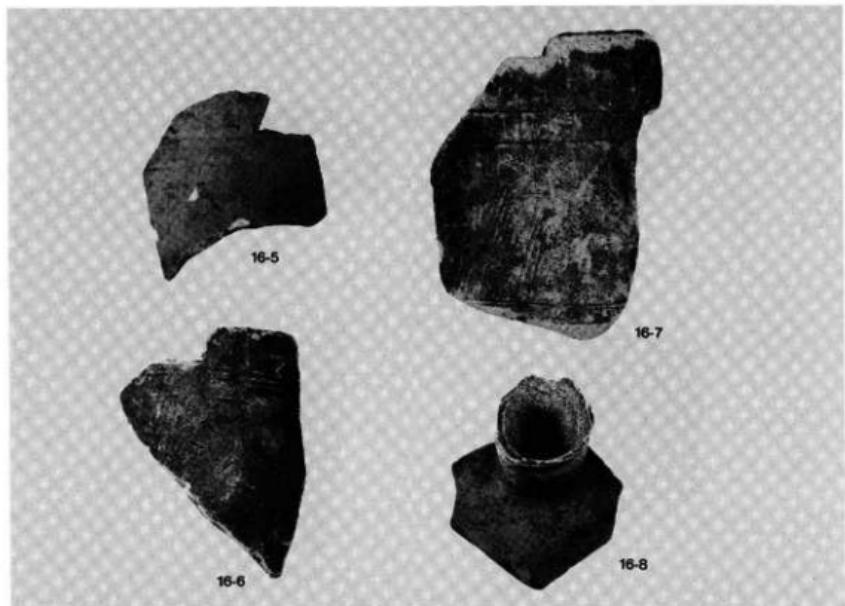
2. 第1トレンチ出土須恵器(1)



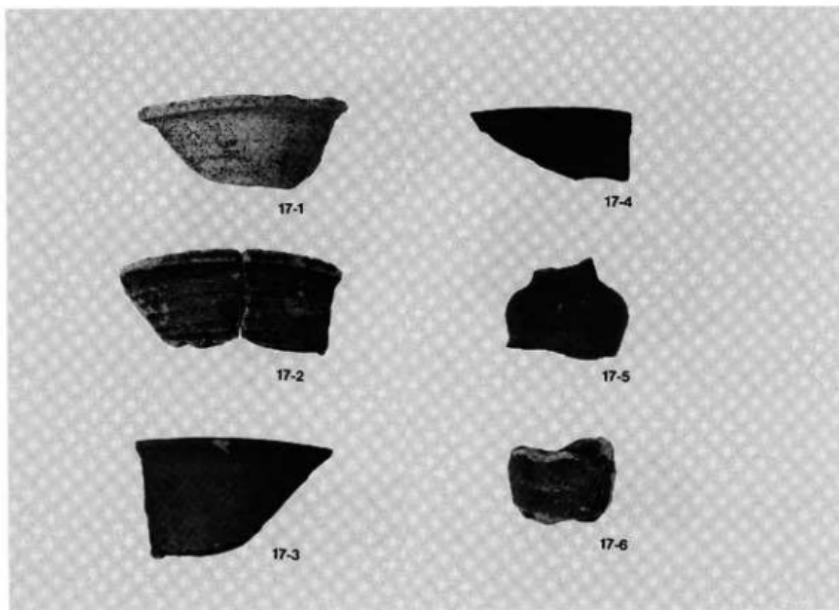
1. 第1トレンチ出土須恵器(2)



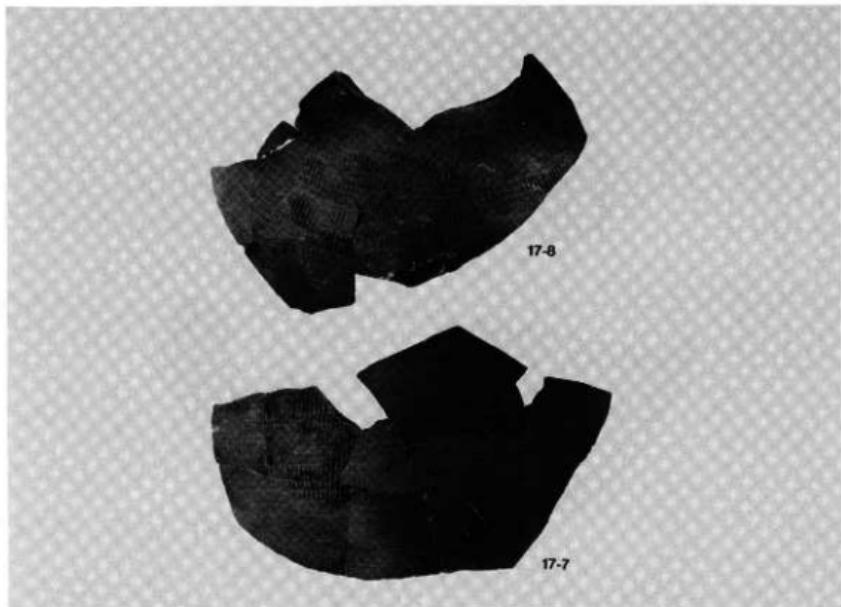
2. 第2トレンチ出土須恵器(1)



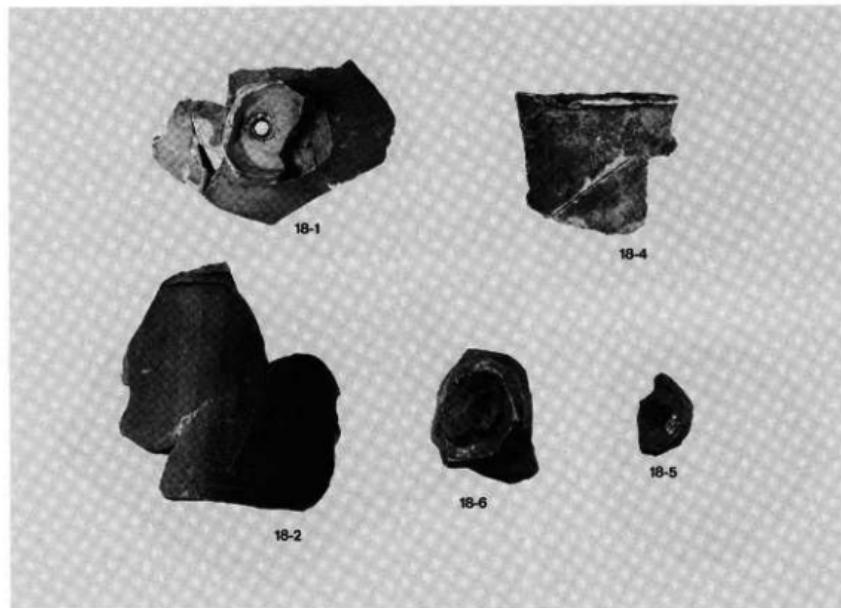
1. 第2トレンチ出土須恵器(2)



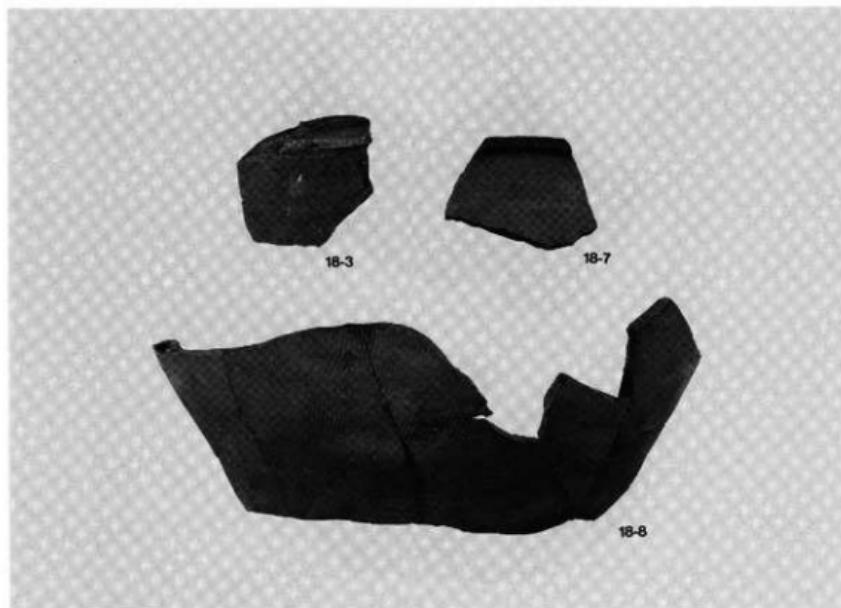
2. 同上(3)



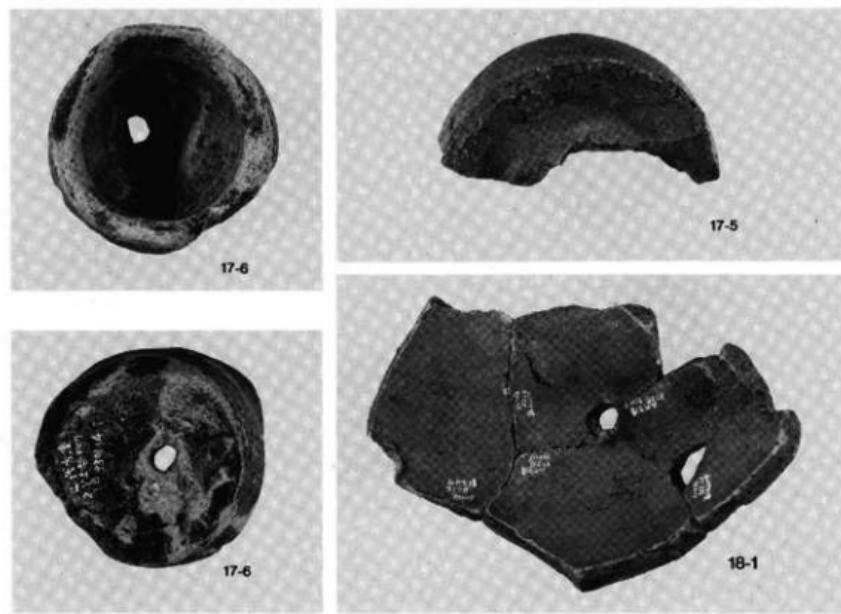
1. 第2トレンチ出土須恵器(4)



2. 第3トレンチ出土須恵器(1)



1. 第3トレンチ出土須恵器(2)



2. 親壺、子壺細部



1. 大庭鶏塚古墳遠景（西から）



2. 大庭鶏塚古墳石材露出状況



1. 大庭雞塚古墳露出石材(1)



2. 同上(2)

1993年3月20日印刷
1993年3月30日発行

風土記の丘地内遺跡発掘調査報告IX

——山代郷正倉跡・山代方墳——
付・大庭鶏塚古墳

編集・発行 烏根県教育委員会
松江市殿町1番地
印刷・製本 株式会社報光社
平田市平田町993

大庭鶲塚古墳

